
こどな！ 2

ししとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こどな！2

【Nコード】

N1570V

【作者名】

ししとう

【あらすじ】

コナンたちはジンとベルモットをようやくFBIとCIAの協力により、捕まえることが出来た。これで組織への道が繋がった。そんな折、アメリカにいるジョディから電話があった……。

前作、『こどな！』の続編になります。

プロローグ（前書き）

組織視点です。

ブローグ

風が強い。

深く沈んだ宵闇^{よいやみ}。ビルの屋上に寝そべっている女は元々狐のように細い瞳を更に細める。

女の両手にあるのはライフル。普通の世界で生活してきた人間がその光景を見て『サバイバルゲーム』の延長などと思うことすら出来ないほど、女の手の中にあるライフルは威容な輝きを放っていた。全長一二〇八ミリ。女の背丈の半分以上あるそのライフルを持って、女は不釣合いと言わせまい雰囲気を漂わせていた。

『H & K P S G - 1』

ドイツのヘッケラー & コツホ社が開発したセミオートマチックの狙撃銃。当然、普通の生活をしていてそんなものに縁が出来るはずもない。あつたとしても映画やゲームといった仮想空間^{ヴァーチャル}の中だけだろう。

チャチなヘルメットであれば一撃で粉々に頭蓋骨ごと粉碎してしまふライフルだが、彼女はそれをまるで日常で扱う代物かのように、乱暴に握りなおす。『素人』であれば衝撃を押さえつけようと体を強張らせるモノだが、彼女は衝撃とは押さえつけるモノではなく、受け流すものだとして理解しているのか、普通の女では扱えないライフルの衝撃をどう効率よく逃がせばいいのかを完全に把握しているかの如く、頭の先からつま先までをわずかに揺らす。

女はくちやくちやと口の中でガムのようなモノを噛みながら、冷たいスコープの先、約六〇〇メートル離れた標的を眺める。

硬質ガラスで囲まれた部屋の奥にいる男がはつきりと見える。

屈強なボディーガード数名に三六〇度囲まれた男は四〇代か五〇代くらいの肌が黒い男。黒い肌のせいかな時折見せる笑顔からこぼれる白い歯が目立つ。民衆に手を振られれば、それを振り返し、野次を超えた罵詈雑言を言われても、なお笑い続けた。

女は標的の名前を知らない。知っていることといえばコードが『
プレジデント
大統領』ということぐらい。

世界的国家であるアメリカの初の黒人大統領。女は殺す相手の名前なんかに興味も湧くはずもないし、そもそも黒人というものを嫌っていた。

特にだからという理由はない。ただなんとなく嫌っていただけだ。肌の色が異質というただ一点だけで、女は殺すことに躊躇いも生まれないほどに嫌っている。

（風が思いのほか強い……か。照準を三クリック左へ……っと）
スコープの側面についたネジを回しながら女はそんなことを呟く。偽善の笑顔を浮かべている黒人の男が女の標的だった。

女が真正面から男に立ち向かい勝てるかと聞かれれば『勝つことは出来る』だろうが『勝利を得ることは出来ない』と答えるだろう。いや、アメリカのトップの人間に立ち向かおうとした時点で挑んだ者は既に敗北しているのかもしれない。万が一、いや、億の確率で男を倒すことが出来たとしても、アメリカという大国家に殺されるだけだ。戦争をすることで世界の頂点に上りつめた、ある意味での世界最強に、殺されるだけ。

だが、言ってしまうえばそれだけだ。

真正面から戦って勝てないのであれば、真正面から戦わなければいいだけのこと。

世界を相手にして勝つ方法は二つある。

一、顔を見られることなく殺す。

一、相手が危険を感じる前に殺す。

ならば話は簡単だ。相手が『自分の命が狙われている』ことに気づく前に一撃の不意打ちをしてしまえばいい。そうすればどんな国のトップに対しても『勝つ』ことが出来る。

元々狙撃というモノは最強の不意打ちだ。一撃を決めることが出

来れば確実に命を刈り取ることができ、一撃を決めることが出来ない時点で、スナイパーは『敗北』する。

スナイプが外れた時点で相手は『自分の命が狙われている』ことに気づき、自分の身を屈強に固める。防弾チョッキをトイレの時も寝る時にも着用し、金をいくつも積んで雇ったボディーガードに二四時間体制で自分の周りを固められてしまえば、いくら熟練のスナイパーであっても、それを仕留めることは難しいだろう。

だが、言ってしまうえば一撃を決めることさえ出来てしまえば、スナイパーの勝ちなのだ。

(チツ……ビル風が吹きやがる……、照準右クリックー修正……)

女は口の中のガムのようなものを噛みながら小さく呟く。

鉛弾というモノは意外と風に流されてしまうものだ。しかもビルが密集した場所であれば風は一方から流れてくるものとも限らない。いくつもの風と風がぶつかり合い、まるで渦でも作るかのよう

に、あらゆる方向へと散っていく。

一撃を決めることが出来なければ自分の負けが確定してしまう。

だからこそ女はこの一撃を外すことが出来ない。上下左右の微調整を繰り返しながら、最適の場所を見つける。

女は引き金に指を置く。

引き金に指を置くことに躊躇いはない。この引き金を引いてしまえば一人の生身の人間の頭部がぐちゃぐちゃに飛び散り、一人の『人間』が『肉片』へと変貌することも頭の中で分かっている。女の顔には迷いの表情一つ見せない。

女への命令は唯一つ。コード『大統領』^{プレジデント}を遠距離狙撃で粉砕するだけ。

(……………)

女は静かに風の音を聞いていた。ぶつかり合う風が、一定の方向へと向かう、そのタイミングを待っていた。

そして、

刹那。

時間にしておよそ二秒弱。複雑なビルの風が一定の方向へと向かった瞬間、

女は引き金を引いた。

花火工場が爆発するような轟音ごうおんと共にいくつもの鉛弾が空を引き裂く。驚いたことに女は使い慣れたライフルを自らで、無理矢理の改造を施して本来セミオート射撃であるはずの『H & K P S G - 1』でフルオート射撃を行っていた。大の男でもひっくり返ってしまうほどの衝撃を、華奢な体の女は無理矢理に受け流し、秒間五発ものの弾丸を、針の穴にでも通す正確さで射出していく。

わずか一秒間で空になった弾倉とカラカラとビルの屋上に転がった薬莢やつきょうを拾うと、女は標的の末路を目で追った。風の流れも完璧に組み込んだ射撃であるが故にその弾丸が逸れるはずもない。その確信のみが標的の悲惨な末路を女の頭の中に思い浮かばせる。

スコープ越しでのぞいた世界は惨劇であつた。

ボディーガードが取り囲んでいた『大統領プレジデント』は人間という名称から肉片という名称へと変貌していた。頭の形状は既に保たれておらず、完熟したトマトを高い場所から床に落としてしまった時のように、無残、という言葉が似合うほど無残だった。

しかし、その無残な現実が周りで起きても男の周りにいる人たちは騒ぐ気配を見せない。何も周りの人間が全員、それこそ都合よく盲目であるという訳でもない。

「チッ」

女が忌々しく舌打ちをすると、ブンツ——、と。目の前の光景が掻き消されるように歪んだ。

ざざざ——、と映画のフィルムが燃えていくように女の視界から全ての光景が消え失せる。

「やっぱ……六〇〇ヤードが限界かよ」

女は視界を覆っていたゴーグルを外す。との同時に暗くなってい

た視界が明滅する。

「あん？」

どうやら誰かが部屋内の明かりを付けたりしく、今まで真っ暗だった室内がぼんやりとだが明るくなり始める。

「おい？ 誰かいんですか？ 人様の邪魔をするバカはこのバカですか？」

もっと標的の無残さを眺めていたかった女は若干苛つきながら立ちあがる。寝そべっていたことにより乱れた長い金髪を掻き揚げると、氷のような冷たい蒼い瞳が暗闇から覗いた。左目の周りには黒いアゲハ蝶のタトゥーが彫っており、見た目からして日本人らしくらぬ雰囲気だった。

女は首を捻った。女が今いる場所は『遠距離狙撃練習場』という簡単に言ってしまうえば実際の狙撃銃を用いて、仮想空間的に『狩り』のシミュレートが出来る場所だ。広さは五〇畳以上もあり、入り口の近くに誰かが立っていたとしても、女が今立っている場所から顔を見ることは難しいだろう。

「ここにいたか」

声のした方向に目を細めながら顔を向ける。ちょうど明かりが届かない場所に立っているのが遠目から確認することが出来た。

「……………」

女は何が気に入らなかったのか、腰に挟んであった拳銃、トカレフへと手を伸ばし、何を思ったか躊躇う様子一つ見せずにそれを放った。

ほとんど狙っていない照準ではこの距離で当てることなど出来ない。しかし、女の目的は拳銃で男を撃ち貫くことではなく、壁に撃ち貫いた際に発生する火花で相手の顔を見ようとしたのだ。

結果、男は顔も名前も知らない新参モノだった。

「なんだ……三下クンですか？ 酒の名前も付いてないお雑魚クンが一体アタイに何か用でもありますか？」

元々女は媚び諂うという行為があまり好きではない。しかし、そ

の媚をわずかに見せた相手は自分が認めたモノか、自分よりも強いモノと決まっている。明らかに自分より弱い存在に対して媚を見せる必要がないと分かった女は明らかに苛付いているという様子を相手に見せ付けることでこの場から早く消えさせそうとした。

男は女のいきなりの発砲に心臓が破裂してしまいそうなほど脈動させ、手にはじわりと汗が滲む。男はすぐにその汗を黒いスーツパ
ンツで拭くと、

「く、キャンティ……貴様……」

明らかに震えた声。

キャンティと呼ばれた女は愉快だった。たった一回のわずかな動作だけでここまで萎縮されると、どこか喜劇でも見ているかのような愉悅に浸れる。

このまま笑っているのでもよかったのだが、男が耐え切れずに言った言葉を無視する訳にはいかなかった。

「クソ……、邪魔して悪かったな。手短に話を終えることにする。
ジンがFBIの連中に捕まった。話は以上だ——ッ」

男はそれだけを言うのと逃げ出すように『遠距離狙撃練習場』から立ち去っていった。

キャンティはそれを確かめるように自分の携帯電話を開く。着信もメール受信も一切ない。

あの話が本当かどうかを確かめる手っ取り早い方法は自分からジンに連絡を取ってみるのだが、それをする度胸も、そもそもそれだけのリスクを負う必要もない。

それが事実かどうかを確かめる必要もない。

唯一つつ分かつていることは、ジンという自分よりも立場が上で、自分より遥かに強い男が、動くことが困難であること。本当にあの情報がデマで、自ら自分の立場を危くするデマを流したのが自分であろうが他人であろうが、それが嘘ならば組織のボスに対して絶

対的な信頼を寄せている男がそれを無視をするはずもない。何かしらのアクションを起こすはずだ。

「く、くくく……」

それだけ分かれば十分だった。否、十分すぎた。
左手で自分の左目を抑えると、

「つまり……だ？」

誰かに問いかけるように小さく、

「これはチャンスってことだよなア……？」
小さく呟く。

プロローグ（後書き）

皆さん、お久しぶりです。ししとうです。

ようやく続編のめどが立ち、投稿することになりました。

今回は色々和新キャラも出てきたりと、作者の新しい挑戦になるかもですが、よろしかったらお付き合いくださいませ。

感想・評価お待ちしております。

蒼い鳥 Blue Bird・(1) (前書き)

コナン視点です。

蒼い鳥 Blue Bird・(1)

——のひいてあるかんじをひらがなでかきましょう。

青いボール。

『あお』

赤いふうせん。

『あか』

——のひいてあるひらがなをかんじでかきましょう。

みぎをむく。

『右』

あめがふる。

『雨』

江戸川コナンは高校生である工藤新一がA P T X 4 8 6 9という毒薬をとある組織に吞まされて幼児化した人間だ。

コナンの見た目は完全に小学一年生の子供だ。どう頑張っ
て見ても生意気な子供にしか見えない。どれだけ子供かと言うと、数回顔を合わせたことがある程度のお姉さんと一晩一緒のベッドで寝ても何の間違いも起きないくらいだ。そのお姉さんが一緒にお風呂に入りそうな雰囲気を感じ取れば家のお風呂ではなく、外のお風呂に行くという手段も取ることが出来るが、差し出された手を振り払うことが出来ない子供だ。

しかし、やはり中身は高校二年生の工藤新一でもある。

「あー……………つまんねーな」

コナンは口の端で鉛筆をタバコのように咥えながら机に肘を突きながら天井を見つめ、そんなことを呟いた。

九月十日。

本日は夏休み明け、初めての小テストだ。夏休みの間に皆が勉強をサボっていないかを図るための小テストらしいが、そんなことはつきり言ってもいい。

コナンは視線を天井から机の上の一枚のテスト用紙に向ける。

やはり何度見ても頭を抱える。

テストがとてつもなく難しいからという理由であれば、コナンとしては逆に燃えるという体質なので何の問題もなかっただろう。むしろ逆だ。

「……………」

——のひいてあるかんじをひらがなでかきましょう。
空をみる。

『そら』

白いイヌ。

『しろ』

——のひいてあるひらがなをかんじでかきましょう。
いしをひろつ。

『石』

てをふる。

『手』

江戸川コナンがただ今絶賛解答中の問題がこれである。

一言でいえば簡単すぎる。

常識問題を通り越して、それなりに日本で育った日本人であれば誰でも答えられるような問題にコナンはやる気というやる気を根こそぎ奪われていた。

「ちゃんとやらないと先生に怒られるわよ……江戸川くん」
「んあ？」

顔も体もこちらに向けることもしないでそんなことを呟くのはコナンの隣の席で涼しい顔で黙々と鉛筆を動かしている少女、灰原哀だ。日本人離れた赤みがかった茶髪とこれまた日本人らしからぬ青い瞳が特徴の少女である。

「んなもんとつくに終わっちまってるっつーの。お前はいいよなあ……、何でもかんでも受け入れられてよー」

「そうかしら？」

相変わらずそっけない態度の少女は実は江戸川コナンと同じ立場でもある幼児化した人間の一人だ。元の名前は宮野志保^{みやのしほ}と言い、とある組織の元一員で『シェリー』とも呼ばれたりしていたが今現在は灰原哀という名前を名乗っている。哀もコナンと肩を並ぶことが出来るほどの知識の持ち主なので小学校一年生レベルの小テストなど眠気がマックスの時であっても簡単に解いてしまうほど簡単なはずなのだが、どうにも器用に問題を解いているようで、コナンよりは小テストに対する悩みはないようだ。

「ちよつと新一、静かにしないと見つかるよ」

コナンの後ろから鉛筆の後ろの先をつんつんと背中^{きおく}に当てながら注意を促しているのは希麻^{きあさ}タナという少女だ。長い黒髪で前髪が少し盛り上がってるのは寝癖というよりはしつこい髪癖でタナ自身も気をつけてはいるらしいが、どんな美容師に頼んでもどうにもならないのでほとんど諦めているらしい。そんな少女もまた、江戸川コナンと同じ立場にある。彼女は毛利蘭^{もりのうら}と言い、工藤新一とは幼なじみという関係性で、コナンの正体に気づく前にコナンに新一のことが好きだと言ってしまったことがある天然娘だ。

と、コナンはタナがそのことらしきことに関することを言っていたのを思い出す。

『いい！ 新一！ あのことは絶対に忘れなさいよね。いい！ 絶対だからねっ！』

『あのこいつて？』

『だ！？ だ、………だから………』

……その、」

『何だよ？ よく聞こえないんだけど……』

『うるさいこのバカ！ 新一がどう思っ
てようかなんてぜんっぜん
気にならないし！ 気になる訳もないしっ！』

その後、コナンは何故か顔を真つ赤にしたタナに高校生から習い
始めたくせに達人レベルまで上達した空手で顔を思いつきりぶん
殴られた。正直タナがどうして怒っていたのかも分からないし、も
しそれが照れ隠しだとしても、もう少し可愛げがある方法はなかつ
たのだろうかと一度だけタナに聞いてみたいと思う。………
いや、やめておこう。もう一度殴られるのがオチだ。ようはタナの
機嫌は絶対に損ねてはいけないということだ。

教室の黒板側の壁にかけられている時計を見る。

九時二三分。

コナンが問題を全て解いてから五分も経っていない。というか問
題は十分前後で全て解いてしまっているの
で後十分近くは暇とい
うことになる。

と、

テスト中にも関わらずぺちゃくちゃと喋っていたコナンがふと教
卓を眺めると、

「……………」

目が合った。思いつきり目が合った。

ぶるぶると体を小刻みに震えさせながらもにつこりとリーマン笑
顔を浮かべている、担任の小林澄子先生と。
こはやしすみこ

小林先生は就任したばかりのころは緊張でもの凄く怖かったりし
たが実際はもの凄くやさしい先生で、皆から好かれているというど
この教師ドラマだよと疑ってしまうほどのいい先生なのだが、

「コナンくん？」

につこり笑顔が超怖かった。

蒼い鳥 Blue Bird・(1) (後書き)

前のあとがきで書き忘れましたが、前回の『こどな!』が35万字という、明らかに多すぎる文字数になったため、今回は10万字前後を目指して書くこうかと思っています。というか、私の作品は長編であれば10万文字を目指しているんですが、流石に35万文字は多すぎました。

という訳で目指せ10万文字前後!!

あ、あと投稿は朝七時にしています。なので、七時に更新がない場合はその日の更新がないと思ってください。

感想・評価お待ちしております。

蒼い鳥 Blue Bird・(2) (前書き)

コナン視点です。

蒼い鳥 Blue Bird・(2)

中身高校二年生の江戸川コナンは小学校一年生担当の小林先生にこつてり絞られた。いくら自分のテストが終わったからと言って、他の人の邪魔をするのはいけません、と。まさか高校二年生の中身がそんなことで怒られるとは思わなかった。

「あー……こんなことなら静かにしておけばよかった……」

時刻は一二時四七分。

本格的に黒髪ショートカットに黒ぶち眼鏡、動きやすいという理由で授業参観など子供たちの親など人目に付く時を除いてほとんど小豆色のジャージを常に着ている小林先生にこつてりと絞られたのは四時限目が終わって、ちょうど給食が始まるのと同じぐらいに職員室に呼ばれ、くどくどと説教をされた。小林先生の口から出てくるのは正論も正論、口答えをする方が間違っていると第三者が見てすぐに分かるほどの正論をぶつけられたのでコナンはこくこくと頷いて、ようやく小林先生から開放された。

給食をとくに食べ終わってボールを片手に校庭の方へと走っていく子供たちの中をぐったりと肩を落としてコナンは自分の教室へと戻っていた。

大体問題が簡単すぎなのがいけねーんだよなー、とほとんど反省もせずにそんなことを考えながらコナンは廊下を歩く。

「ん？」

と、コナンは自分のズボンのポケットに入れていた携帯電話が鳴っているのに気づく。

「えーつと……」

コナンは両サイドのポケットからそれぞれ赤い携帯電話を取り出した。コナンは以前、タナが小さくなる前に自分の正体を隠すために二つの携帯電話を所持していて、一つが『江戸川コナン』の携帯電話で、もう一つが『工藤新一』の携帯電話だ。両方ともまったく

同じ型の携帯電話で、着信音とサッカーボールのストラップが違ふことぐらいしか、どちらの携帯電話が鳴っているのを見極める方法がないために一度両方の携帯電話を手取る。

右手に持っているのがコナン用。

左手に持っているのが新一用。

鳴っているのは右手に持っているコナン用のようだ。

「コナンか……」

コナンはあくまで偽名なのでほとんど他人に向けるような言葉で呟くと、コナンは新一の携帯電話をポケットに突っ込んで、キヨロキヨロと辺りを見回す。

（流石に見つかんのはまずいよな……………）

小学一年生が学校で携帯電話を使っているのを見られるのはあまりよろしくないと考えたコナンは近くの物陰に隠れるように小走りで移動した。

「はい、もしもし……？」

何故か小声になってしまったコナンに対して電話の向こうから聞こえた声は、

『Hay! Coolkid!』

とても流暢な英語だった。

コナンはいきなりの英語にわずかに戸惑ったが、英語を話せる知り合いなど数が知れていたもので、

「もしかして……ジヨディ先生？」

すぐにそれが今、アメリカにいるジヨディ「サンテミリオン」ということに気づいた。以前、帝丹高校の英語教師をしていたこともあり、ほとんど名残のようなものでジヨディのことは先生と呼んでいる。

『It's Cool! 流石ね、声だけで私だって分かるなんて』

「まあ外国人の知り合いなんてジヨディ先生以外あんまりいないからね」

『私からすれば事務所や会社^{FBI CIA}に知り合いをたくさん持つてる小学生

の江戸川コナンくんの方が珍しいと思うけどね」

笑いながらジョディはそう言うが、これは冗談ではない。コナンが今話しているジョディもまた事務所の捜査官^{FBI}で、事務所が長い間追っていた組織の重要参考人を二名確保して、一度「アメリカ連邦捜査局^I」の本拠地であるアメリカへと帰還したのだ。

そうコナンが聞いたのはつい最近で、コナンが退院した後に、哀とタナ、ついでは言っただけなのだが今現在はコナンもお世話になっっている理解者、阿笠博士^{あがさひろし}から聞いた。

「で？ どうしたの？」

「ま、とりあえず退院おめでとの言葉を言い忘れてたなと思ってね。コナンくんが入院している間に^{わたしたち}FBIは帰っちゃったから」

「仕方ないよ。ようやく組織に少しでも近づいたための手がかりを掴んだんだから。本当に申し訳ないと思ってるなら、今そっちで状況がどうなってるかを聞いてみたいな」

「どうって……言われても……ねえ……」

明らかにそこでジョディの口調が変わる。

どうにも雲行きが怪しくなってきた。コナンはほとんど直感でそう思う。

FBIの人間が捕らえたのは二人の男女。

一人は組織内では「ジン」と呼ばれ、コナンやFBIと敵対し、「凶悪」という言葉をイメージ通りに持つ男。最後の最後までコナンやFBIに敵対し、敗れ、散り、それでも組織のボスに忠誠を誓った男。

もう一人は「ベルモット」という女。女はクリス・ヴィンヤード、更にはシャロン・ヴィンヤードという二つの大女優の名前を持つ変装の名人。老若男女全ての人間に化けることが出来る「女狐」。初めは真つ黒に染まっていた人間であつたが、コナンやコナンの周りにいる人間と出会い、黒から灰色にまで染まっていた女だ。味方と切り切ることも難しく、敵と切り捨てることも出来ない、そんな印象の女。

事務所や会社が追っていた組織というのはコナンたちが追っている組織で、コナンたちの間ではその組織のことを『黒の組織』と呼んでいる。全ての色素が混じり、光さえ飲み込む漆黒の組織。

「どうということなの？ ジョディ先生」

コナンが訝しげに声を潜めながらそう尋ねると、

『どうって言われても……ねえ』 ジョディもまた声をコナンに合わせるように潜める。『お手上げて感じてかしら……ね』

それはコナンに合わせたというよりもFBIの捜査官としてすっかりと自信を無くしてしまったかのように弱っている状態に近い声だった。

『私たちFBIはきつとジンという男が組織の幹部クラスで、少なくとも組織の正体、もしくはは目的に関して何かしらの情報を握っていると思っていたのよね。それはCIAも同様だし、——コナンくんだってそう思っていたからこそ私に聞いたのよね？』 「今の状況」について『ジョディは疲れた様子で、『結果から言わせてもらうとジンは「完全黙秘」。ベルモットに関しては演技の天才である大女優^{ムービースター}……だから何を聞いても信用出来ない。嘘九九パーセントの中に一パーセントの「真実」が混じっていたとしてもそれを証明するのは難しそうなものよ』

「一パーセントの『真実』？」

コナンはほんのわずかだがその言葉が気になった。

何故かその言葉を聞き流すのは、してはいけなと感じた。

蒼い鳥 Blue Bird・(2) (後書き)

今後、この作品では、外国人の名前の表記を、
ジョー・サン・テミリアン
ではなく、

ジョー・サン・テミリアン
と表記していきます。

何故かと聞かれれば、単純に好きだからです。

感想・評価お待ちしております。

蒼い鳥 Blue Bird・(3) (前書き)

コナン視点です。

蒼い鳥 Blue Bird・(3)

『私は元々——尋問は得意じゃないし、その尋問相手がベルモットならなお更。私はきつと冷静ではいられなくなる。だからベルモットの尋問からは自主的、に外させてもらってる』

ジョディはベルモットに家族を殺されたという『過去』を持つ。黒の組織を追っている者であれば誰だってそういう過去がある。心の内底に負の感情を知らず知らずの内に隠し持っている。だからコナンはそのことに関して何も言わなかった。

その代わりに、

「じゃあ……誰がその役を？」

そう尋ねた。

ジョディは少しでも話すのを躊躇ったように、会話の中にわずかな空白を作る。

秒数にしてわずか一秒未満。それを空白と呼ぶか息継ぎと呼ぶかは当人が相当気の利く話し相手ぐらいだろう。コナンの場合はそのどちらでもなかったため、それが空白とも息継ぎとも気づかずに、ジョディの言葉を待った。

そして、

何かを諦めたように、ジョディは電話越しで微かに聞こえるほど小さく息を吸い、

『シュウ、——ベルモットの尋問役はシュウが買って出たわ』

そう言う。

「赤……井……さん？」

『ええ』

シュウと言うのはジョディと同じFBIの捜査官である赤井秀一のことだ。今現在は沖矢昴と名乗り、以前とは声も姿もまったくの

別人として生活している。

それは人としての『生』を繋ぐための治療を施したためだ。焼け爛れた肌を復元し、焼け潰れた喉を治し、融けかけた骨格を無理矢理矯正して、まったくの別人として生きている。

なかみ中身は赤井秀一として。

そとみ外見は沖矢昴として。

幼児化したコナンたちとも似たような境遇で生きている。

みんな世界を騙して生きているのだから。

「じゃあ……その、一パーセントの『真実』ってというのは赤井さんがそう言ってるってことでもいいのかな？」

コナンは心のどこかでずっと引っかかっていた『一パーセントの真実』について聞いてみた。

ジョディはどこか説明しづらそうに、小さく、

『あー……それね』今度はコナンでも分かるほどの空白が空いた後、
『私個人の意見としてはシュウの考え過ぎか、それとも一パーセントの真実ってのが九九パーセントの嘘の内の一パーセントの嘘って気もするのよ。だってあの女が九九パーセントの嘘をついているのはシュウにだって分かっているんだから……一パーセントが真実じゃなくて嘘って可能性のほうが高いじゃない？』

ジョディの言葉はベルモットに対する過去を断ち切れずに、どこか嘘だと決め付けているように断じていた。

「何を言ったの、ベルモットは？ 何を聞いたの。赤井さんから」

『聞いても何も面白くない答え。寧ろゴール直前にふりだしに戻される悪質なすごろくゲームのような、つまらない答えをシュウの口から直接聞いてしまったのよ』

「……、」

コナンはじつと、ジョディが言葉が続けるのを黙って待った。

ただの無音ではなく、呼吸を押し殺した、人間染みた沈黙がいつまで続くかと思ったが、

『本当に——つまらないわよ。それでも聞く？』

意外にも沈黙はコナンが思っていたよりも早く壊れた。

コナンは頷くのと同時に、

「うん。聞く。聞かせて」

そう言った。

ジンが『完全黙秘』を貫いている以上、組織に関することはベルモットから聞くしかない。だからこそ赤井は自らベルモットの尋問役を買って出たのだろう。ならば少しでも得た成果を聞いておくことは、コナンの目的の手助けに、わずかばかりでもなるだろう。

だからこそ、聞いておきたい。

『信じるか信じないかは全部、キミに任せる。コナンくんは賢いから……きつといい判断をしてくれると信じてるわ』

眩しい笑顔を浮かべている姿が電話越しに伝わるほど明るい声でジヨディはそう言った。

ジヨディはコナンの返事を聞いて、全ての覚悟が決まったように、『ベルモットは明らかな嘘を私たちに伝えたの。自分は誰も殺してないとか、自分はベルモットじゃなくてクリス・ヴィンヤードだとかね。けど、それはシュウに言わせれば組織の人間に対する隠蔽工作だって言っていたわ』今度はスラスラと聖書でも読み上げるように話し始めた。『口から出てくる言葉の九九パーセントが嘘ならば、組織の人間が盗聴をもし仮にしていたとしても、口を割るつもりはないと勝手に判断して、一パーセントの真実には気がつかない。そう、シュウは言っていた』

「どうして赤井さんはそこまでベルモットのことを信用していたの？」

言葉にジヨディは少しだけムツとしたように、

『さあね』

関係ない話はすると言わんばかりにジヨディは無理矢理話を戻す。

「????」

何だかよく分からない気迫のようなものが電話越しにまで伝わっ

てきた。コナンが眉をひそめながら困惑していると、

『シユウが言うにはベルモットが伝えたい真実は二つ。けれどその真実は一パーセントで括っていいぐらい同じ内容。それでもいいわね』

ジョディは答えも待たずにそのまま続ける。

『一つは、組織の正体。それはベルモットも知らない』

『そしてもう一つ、組織の目的。それもベルモットは知らない』

コナンは心臓が凍りつく。

あまりにも想定していた答えとはかけ離れた真実に、たった一パーセントの真実に、何も言うことが出来なかった。

蒼い鳥 Blue Bird・(3) (後書き)

いやゝ、シリアスつまんねーっすね。

感想・評価お待ちしております。

蒼い鳥 Blue Bird・(4)(前書き)

コナン視点です。

蒼い鳥 Blue Bird・(4)

電話が終わったコナンは適当に礼を言っただけで電話を切った。

だが、それはこれ以上『現状』を聞きたくないと思つたコナンの小さな意思表示だったのかもしれない。

——組織の正体、それはベルモットも知らない。

——組織の目的、それもベルモットは知らない。

正直、何かもう少し具体的な手がかりを期待していたというのが本音だ。何しろあの二人を、たった二人の人間を捕えるだけで、文字通り命を賭けた。

それだけのことをして、得ることが出来た情報はたったの二つ。

しかし、そのどちらもが何も分からないということだけだ。九九パーセントの嘘の中にパーセントの真実を紛れ込ませるなんて煩わしい方法で伝えた言葉に、嘘があったのかどうかを見極めることは難しい。そして何よりベルモットはFBIに対して『自らの拘束』に対して、一つの条件を突きつけている。その条件は一枚のディスクをFBIの力を使い、誰の目にも届かず、誰の手に触れることなく、誰の記憶からも干渉されない、そんな場所に一枚のディスクを永久に保管することだ。

そのディスクの内容はベルモット曰く『黒の組織のボスの記憶』とのことらしい。今思えば、それはベルモットの何かしらの比喻だったのかもしれない。だがそれがどのような比喻だったのかを確かめる術を今のコナンは知らない。知っていたとしてもコナンがそれを確かめる方法はないし、アメリカにいるベルモットに確かめることも出来ないだろう。

「はあ……」

コナンは急に足が重くなった気がした。

別に廊下が心臓破りの坂という異名があるような急激な上り坂であるとかそんなはずはない。足というよりは足を動かすための気分の方が重いのだ。

ここまではつきりと手詰まりになってしまつと、コナンは完全に“待ち”に回るしかなくなるのだ。

コナンの第一目標はやはり、自分の姿、タナや哀の幼児化した体を元の高校生に戻すことだろう。元々探偵一人で立ち向かうにはあまりにも強大な組織。いくら『^{FBI}アメリカ連邦捜査局』や『^{IA}アメリカ中央情報局』の協力を得ることが幸運的に出来て、戦うことが出来るようになったとは言つても、アメリカという大国家の代表される二大組織が束にかかつて、あれだけの成果しか出すことが出来なかった。

そう考えるとコナンの第一目標でさえ、達成するのは困難にしか思えない。その目標を果たすためには最低限、コナンたちの体を幼児化させた毒薬『^{アボトキシ}APT X 4869』の詳細なデータが必要だ。一から薬を作り出すのは現代医学ではほとんど不可能に近い。

哀は以前まで組織内で『シェリー』というコードネームを持つ、組織が殺すことを躊躇うほどの有能な科学者の一人だった。その科学者でさえ、何のデータもなく、何の確証もなく、薬を作ることには出来ない。

それが『^{アボトキシ}APT X 4869』という毒薬を超えた妙薬ならなお更だ。あの薬の第一の特徴として、薬の成分が体内で分解、そして体内から薬の痕跡が消滅する。組織はその世界の常識を全て覆すような、まるで作り物の世界の産物のような薬を『^{フィクション}完全犯罪』を成すために開発、そして利用してきた。しかし組織でさえ、想定していなかった事態が起きた。それがコナンたちの幼児化だ。本来殺すために使用されてきた“毒薬”で人が死なずに幼児化されないということとはあつてはならない。しかし、その想定外のことが起こつた。しかも三人続けて。

一人目は工藤新一。
二人目は宮野志保。
三人目は毛利蘭。

一人目は本当に『偶然』で起きたのだろう。しかし二人目は『確信めいた何か』を感じ取り自発的に飲用した。さて、三人目は果たして『偶然』だったのだろうか。

そもそも、組織は本当にこの事態を『想定外』としていたのだろうか。
いつから『想定外』と認識し、いつから『想定内』と判断したのだろうか。

それは一個人の判断か。
それとも組織全体の判断か。
分からないことを上げてしまえば、いくつも上がる。逆に分かったことを上げるとすると何も上がらないというのに。

(……………)
コナンは廊下を歩く子供や先生たちに見えないようにポケットの中に手をつっ込んで、その中で小さく、握った石でも粉碎するように拳を握る。

(結局……何も分からないままか……)
忌々しく思うのは自分の未熟さか。

こんな時彼が敬愛し、崇拜する、紙の上の史上最高の探偵、シャーロックホームズであればどうするのだろうか。

「……、んなの」コナンは自分にだけに聞こえるように舌打ちして、「分かんねーよな。この事件を解くのはホームズじゃなくて、俺なんだから」

どちらにせよ、コナンはこの事件を決して諦めたりなどしない。詰まるところ、江戸川コナンは——やはり探偵なのだった。

蒼い鳥 Blue Bird・(5)(前書き)

コナン視点です。

蒼い鳥 Blue Bird . (5)

コナンはようやく自分の教室に戻ってきた。説教をされていた時間は一〇分にも満たないほど短い時間だったのだが、流石に食べ盛りの子供としては昼飯を抜きにされるのは簡便願いたいと気持ち小走りで教室へと向かっていったのだ。

「ようコナン！ 遅かったじゃねーか！」

「うわっと!？」

扉を開けた途端、コナンは思いっきり軟らかい壁に衝突してしまい、その場に尻餅をついた。

「いてて……」

「何やってんだよコナン。バツカじゃねーの」

そう言つてコナンに指を指しているのが先程の軟らかい壁の正体でもある、小嶋元太だ。こしまげんた明らかに普通の小学一年生よりも大きな体の少年は悪意ゼロの悪態を付いて満足そうに笑っていた。

「おい、気をつけるよ元太」

この少年の弱点は本当に悪意ゼロで、自分の思ったことを馬鹿正直に言っていることで、何か文句を言つても聞き流されるというところだ。

案の定元太はコナンの些細な文句を軽くスルーして笑い続けている。

そんな元太を呆れながら尻餅をついたまま固まっていると、

「もう元太くんったら。だいじょうぶ？ コナンくん」

そんなコナンを唯一心配して、細い手を伸ばしてきたのがクラスメイトの吉田歩美よしだあゆみだけだった。頭に黄色のカチューシャをつけた少女はコナンに対して腕を伸ばして『？』と小首を傾げる。

どうやらいつになつてもコナンが腕を取らないことに不思議そうにしているようだ。

コナンとしては、自分が転んだというのに手を差し伸べてくるの

が歩美一人というのはいかなものだろうかと考えていた。無論、人とぶつかっただけで命に関わるような大怪我をするなんてことはありえないし、そもそもコナンは尻餅をついただけで、かすり傷一つも負っていない。だがしかし、せめて心配するフリぐらいはして欲しいものだ、と、歩美の後ろに見える哀とタナノ談笑光景を見ながら半分以上本気で思う。

「悪いな。サンキュー、歩美ちゃん」

コナンはうだうだ考えていても仕方ないと思い、さっさと歩美の手を取って立つ。

「えーっと……………」

コナンは無事に立ち、ぱちぱちと瞼を開閉する。

普通、倒れている人に対して手を伸ばす場合、手のひらを相手に掴んでもらい、それを思いっきり引っ張って、倒れている人を立たせるものだ。

「あのー……歩美……ちゃん？」

だから決して、互いの指と指を組むような甘^{こいびとつぼい}ったるい感じで手を繋ぐなどありえないはずだ。

だが、

「えへへ……………」

コナンはもう一度だけ自分の手を見る。

何というか微笑ましい。中身高校生の工藤新一くんとしては小学生の女の子が憤ましく頬をほんのりと桜色に染めて、無意識的に笑顔になる女の子を見て、素直に微笑ましく思う。何かの恋愛ドラマの中の恋人のように手を繋いでいる光景は微笑ましく思う。

しかし、何をどう間違ったらこうなるのだろうか。

「……………ほほう」

コナンはギギギ、と。首周りの整備を怠ったロボットがぎこちなく振り返るように、背後を見る。

いた。そこに二人の少年が立っていた。

一人は先ほどの肉壁こと、小嶋元太。

もう一人は、小学一年生にしては頭の切れる円谷光彦^{（つぶちやみつひこ）}。元太や歩美、そしてコナン、タナ、哀と同じ、『少年探偵団』の一員だ。『少年探偵団』と言うがようは仲良しグループのようなもので、仲間というよりは友達という表現が分かりやすいかもしれない。

その友達二人がコナンを見ている。全力全開の羨望の眼差しを向けて、全力全開の力をその右拳に込めて。

「また……ですか、そうですか」

「お前はいつもそうだよなあ……気づくと抜け駆けをしてやがる……」

「お、おい待てお前らちよつと待てッ!! 声のトーンがおかしい! 低い。ものすつごく低いぞお前ら!!」

「はははははははは………」

同時に笑う少年二人の顔には笑顔がない。笑っているのに笑顔がないとはこれいかに。

これがコナンの、コナンたちの日常。いつも通りの風景。一人の少年の悲鳴が聞こえても、それが平和。通常運転。

蒼い鳥 Blue Bird・(6)(前書き)

コナン視点です。

蒼い鳥 Blue Bird・(6)

「あいつつら……マジで……本気で殴りやがって……」

真夏を越えたくせに未だ夏の暑さを引きずる秋の夕暮れ、学校が終わった『少年探偵団』諸君、歩美、元太、光彦、タナ、哀の五人は放課後の道を小学生らしく楽しそうに雑談を交わしながら帰っていた。ただ一人、コナンはぐったりと保健室から『喧嘩もほどほどにしないとだめよ』と言って渡された明らかな手抜き治療道具の剥き出しの氷を赤く腫れ上がった両頬チウキョウに当てながら歩いていた。

喧嘩っていうかアレ……もうほとんどリンチだよなー、と保健室の先生の爽やかな笑顔を思い出しながら、少年二人の鬼気迫る顔を思い出す。

(俺、何も悪くないよな……絶対悪くないよな……)

子供は手加減というものを基本的に知らないらしく、歩美という一人のアイドル的存在を取られまいとする少年二人の一撃は、本気で嫉妬が力を増長させているような衝撃だった。

「ご愁傷様」

前を歩いている軍団から歩みを緩めて隣に来たのは、哀だ。

コナンは視線だけを動かして隣に来た哀を見る。

夏の暑さが未だ残る名残だろうか、哀は青のボーダー&レースチュニックTシャツに白のフリルスカートという清潔感を前面に出したような服装だった。相変わらず哀が好んで着るような服装は、小学生がするような“お洒落”を通り越していると思う。

いつもはコナンに『もっと子供らしくしろ』と耳が痛くなるほど言っているくせに、その服装はいいのかと結構本気で突っ込みたい。

「何だよ」

「べっつに〜」

「……………」

明らかにやにやしている哀に対し、コナンはこれ以上何かを言

うと絶対にかかわれる、確実にからかわれると思い、口を閉じる。
「これからは“探偵さん”じゃなくて、“色魔さん”って呼んだ方がいいのかしら？」

「……………」

無視だ無視、とコナンは完全スルーを決め込む。

「ん？」

と、コナンが完全無視を決め込みとうとしていた哀の顔からあのいやらしく笑う表情が消えていることに気づいた。そんなに無視されたことが傷ついてしまったのだろうか、内心バクバクと緊張していると

「——何かあった？」

不意に哀は言う。

本当に不意だったので、コナンは一瞬だけその言葉を聞き逃す。

「何だつて？」

「だから……何かあったの？」

「何でそう思うんだよ。別に何もねーよ」

「職員室から帰ってきてからの貴方、——何か変だなと思ってね」

「そ、それは——」

コナンが言うよりも早く、

「まさか……小林先生に本気で怒られて本気で落ち込んだ、なんて言わないでしょうね。あんなの貴方にしてみれば日常茶飯事の出来事じゃない。だからもう一度だけ聞いわ」哀はじつとコナンの瞳を見て、「——何かあった？」

哀はいくつもの犯罪者をその目で見てきた。

何せ、哀が以前までいた組織は犯罪を生業とするような『犯罪組織』そのものなのだ。殺人は当たり前。中には誘拐、拉致、監禁、窃盗、放火——数を上げればキリがないほどの犯罪を行う黒い組織。

その中には当然、詐欺といったような姑息な手段を用いて相手を騙し、金を雀り取るような輩もいた。

だからこそ、哀は嘘に敏感だ。

それが真実か偽りかを見極める眼力はないにしても、それが嘘であるか真実であるかどうかの見当はつく。

だから、哀はもう一度。

「何かあったのなら話しなさい。工藤くん」

一歳年上の宮野志保として、尋ねた。

それは確かに一歳という年月を多く重ねたお姉さんの言葉だった。それは確かに、単純な“心配”から出てきた言葉だった。

だからこそ、“他意”はない。

敵わない、コナンは漠然とだが、しかし確実に敵わないと思った。コナンは正直、『何かあった』かなどとは思っていなかった。否、今でさえ、哀とこうして話をしている今でさえ、『何かあった』などとは思っていない。

確かにコナンはジョディとの電話で知った『パーセントの真実』とやらに一度はショックを受けたのかもしれない。それは認める。

しかし、コナンは自分の中で決めたはずだ。どんな真実が突きつけられたとしても、それがどうしたと笑って、どれだけの時間をかけてでも事件を絶対に解決してみせる、と。

探偵としての性が。

江戸川コナン――、工藤新一としての性が。

しかし、コナンは自分が思っている以上に、真実に対して達観出来なかったのかもしれない。

どんなに背伸びをしたところで、コナンは『名探偵』になりきれない『素人探偵』だ。自分では気づけないほど、顔に出ていたのか

もしれない。

そして、それに気づいたのが目の前にいる少女、灰原哀。

「なあ……志保」

「相変わらず貴方にそう呼ばれるのは慣れないわね。……なに？」

訳あって哀のことを志保と呼ぶことにしたコナン。そのコナンに志保と呼ばれることに慣れない哀はいつもそうやって笑う。しかし、今はそんなことに構っている状況ではない。

「聞くけどよ。本当に、何でそう思ったんだよ。俺が何かあったって」

そうね、と。哀はワザとらしく顎に細い指を置いて、嘘みたいうーんと、唸りながらこくと小首を揺らし、それこそ漫画みたいに、

「なんとなく、……かしら？」

あっさりと言う。

「伊達に貴方のこと観察してないのよ、私」

そう言って哀は笑う。現在進行形で人体実験の観察を行っている哀は、素敵と素直に思うほど笑う。

やっぱりこの女には敵わない、コナンは単純にそう——思う。

蒼い鳥 Blue Bird・(6) (後書き)

いきなりの志保呼びわりの出来るのも続編ならではの、ですねー。

感想・評価お待ちしております。

蒼い鳥 Blue Bird・(7)(前書き)

コナン視点です

蒼い鳥 Blue Bird・(7)

「なるほど……ね。大体分かったわ。貴方が落ち込んでいる訳」

「別に落ち込んでねーよ」

「あれ？　じゃあしょげてたつて言いたいのかしらね」

「だから落ち込んでもしょげ込んでもいいねーつてのッー！」

と、こんな感じで真実を素直に哀にものの見事にかからかわれながら、二人は通学路を歩いている少年探偵団の四人の少し後ろに離れた位置を歩いていく。哀は基本的にクラスの同級生から『物静かでクール。近寄りがたい雰囲気を漂わせている』と評価されている。ちなみに同級生とは灰原哀の同級生である小学一年生の子供だ。

その『物静かでクール。近寄りがたい雰囲気を漂わせている』と評価されている少女は『あつはつはつはつは』とこれまた珍しく腹を抱えてどこかの戦国武将のように大笑いしている。この光景を彼女に真剣に恋をしている初心な少年が見たら、『こんなの灰原さんじゃないッー！』と言って現実から目を逸らすだろう。

……まあ、何故かこの哀という少女がここまで自分をさらけ出すことの出来る少年は彼一人しかいないので、この光景を誰かが目撃するということは、まずありえない。

少年からすれば理不尽に思う。

「思いつきり笑ってくださいました宮野志保さん。貴女のご感想を伺いたいのですが、よろしいでしょうか？」

ヒクヒクとカエルに電極をぶっさしたようにコナンの頬の上部が痙攣けいれんを起こしている。決して哀にバカにされたのが悔しいとか、そもそも哀に相談してしまったことを後悔しているとか、そんな訳ではない、———と思う。

「不気味な笑顔ね。三点」

何故か採点された。

「ちなみに何点満点中ですかね」

「ん？ 一〇〇点」

「ソウデスカ」

これはもう名誉毀損^{めいよきそん}で訴えたら八割強で勝てる気がする。コナンは半分以上本気で思った。

コナンは哀の失礼極まりない言動をワザと咳き込むことで洗い流し、

「で、結局お前はと思うんだよ。組織の目的と組織の正体をベルモットが話さない理由^{わけ}」

脱線しかけた、というよりも八割ほど脱線した話を無理矢理戻すことにした。

「どうつて……言われても……ねえ？」

哀は腕を組んで、思い出したいくない過去を思い出すように表情を曇らせながら、

「基本的に組織は闇そのものの、なのよ」

何か気持ちの悪いモノでも口にしたように、静かに吐き出す。

「闇そのもの？ ただの犯罪組織だろ。犯罪組織にただのつて言ってる時点で何か間違ってる気もするけど」

「違うわよバカ」哀はふう、と。小さく息を吐いて、「確かに平たく言えば『それだけ』。犯罪組織だなんて言い切ってしまったても何の問題もない。問題はその犯罪組織がどうして捕まらないか」

「捕まらない理由^{わけ}？ 単純にヤツらの隠れ方が上手いか、それとも組織が俺たちの思っている以上に大きいか」

実際に黒の組織を捕まえるという行動を起こしているのはコナンだけではない。世界中に散らばった逮捕権を持つ『アメリカ連邦捜査局^I』や逮捕権さえはないが、世界中に散らばり、その国々の情報をかき集めている『アメリカ中央情報局^{CIA}』と言った大組織も動いている。

しかし、それでも、

黒の組織を捕まえることは出来ない。

ならば、何故。どうして『黒の組織』を捕まえることが出来ないのかを考えてみる。

コナンが考えられる理由としては二つがすぐに浮かぶ。

一つは、組織の人間が警察や、FBIなどの追跡から巧妙に隠れることが出来る点。どんな犯罪者であつてもそれは同じだが、基本的に犯罪者は逃げ切れれば『勝ち』で逮捕されれば『負け』。そして逮捕権のある人間が犯罪者を逃がした時点で『負け』で犯罪者を時効ギリギリでも逮捕出来れば『勝ち』なのだ。言い換えれば、犯罪者と逮捕権のある人間は『勝ち』か『負け』をはっきりと決めるための世界中を庭とした『鬼ごっこ』をしていることになる。もちろん、単純な『鬼ごっこ』などではなく、情報を集め、その情報の真意を正確に確かめて、どこにどう逃げるか、どこにどう潜むか、それを読み合い、駆け引きをし合う、そんな情報戦が主の『鬼ごっこ』。

だからこそ、FBIとCIAはそれぞれの役目をはっきりと分けている。

FBIが逮捕権で確実に組織の人間を逮捕するための枷^{かせ}ならば、

CIAは逮捕権がないため、最初から組織を捕まえることを一切考えずに、組織が潜むであろう地点を、組織全体の目的を、組織の情報を世界中からかき集める兵隊。

その二つの役割を決めた二大組織が手を取り合っても組織全体を捕らえるには至らなかった。

それは組織の人間が単純に、それこそ単純に。身の潜め方が巧妙であるのと同時にもう一つの理由があるかもしれない、と。コナンは考えている。

それが、もう一つの理由。

組織が、アメリカの二大組織の想像を遥かに上回るほど巨大である可能性。

現在のアメリカの総人口が、およそ三億人前後。この全ての人間がFBIやCIAの人間だったとしても、それよりも上回る人口数が組織の人間の総数であれば、捕まえることはまず不可能だ。アメリカよりも巨大な中国にでも逃げられてしまえば手の内ようもなくなる。

中国の総人口数が一三億人前後。三億前後の人間を隠すことも出来ないこともない。

考えるだけで頭が痛くなる話だ。

「分かってるじゃない。そうよ。組織は貴方が考えている以上に、巨大なの」

哀はそれを身に染みて実感しているのか、コナンよりも確実に『巨大』という言葉を意識する。それは言葉だけではなく、無意識的な哀の体の震えが表している。

コナンはそんな哀の腕の震えを見逃さずに、しかし直接指摘はせずに、空をぼんやりと見ながら、

「前にも言ってたな。『貴方は組織の大きさを分かっていない子供だ』って。けど、大きさなんて関係ねえ。どんなにヤツらが巧妙に自分たちの組織を隠そうとしたって絶対に何か証拠は残る。俺はその証拠をヤツらに叩きつけて、ヤツらを絶対に捕まえる。そんなだけだ」

そう言った。

だが、結局はそうなると思う。

どんな障害がこれから先の組織への道にあるかは誰にだって分からない。それこそ、コナンの崇拜する探偵『シャーロックホームズ』にだって分からないだろう。

ならば、『江戸川コナン』という小さな探偵になど到底分かるはずもない。

そこで、ようやくコナンは哀の顔を見た。

「え？」

「なんだ、」

哀はそれが独り言なのか、コナンに対する言葉なのかを考えさせるような小さな声量で呟く。そして、哀は一つ年上の女の子の顔で、

——小さく笑った。

「分、か、つ、て、る、じ、ゃ、な、い。あーあ、心配して損した」

「は？」

訳も分からずにコナンは哀の顔を見るが、哀は肩からずり落ちそうに鳴っている茶色のランドセルを肩を揺らして落ちそうになるのを防ぎ、スタスタ、と。さっさと歩き出す。

「真剣な顔して何を悩んでいるかと思えば何だそんなこと。全部自分で自己解決してるし、何の心配もいらなかったみたいね」

「おい、待てよ灰原。——こら待て、志保！」

どういうことか説明しろ、と。コナンが言い終えるより先に哀は、「結局のところ。貴方のやる事って何一つ変わらないんじゃない？」そう言って、最後に、

「ああ、そうそう。これゼーんぶ、蘭さんのおかげだからね」

「は？ 蘭？」

「貴方がおかしいことに気づいたのも、貴方が落ち込んでいることに気づいたのも蘭さん。私は貴方が落ち込んでいるだなんて全っ然気づかなかったわ。いやーいい気味いい気味」

それだけを言って、手のひらをヒラヒラとさせて前を歩くタナたちと合流した。

「悪かったな！ 覚えとけよ、コラー！」

コナンの叫びなどお構いなしに哀はタナたちの談笑の輪の中に消えていった。哀の相談中と相談後のテンションの違いに驚きながら、『以前の根暗っぽい性格よりはいいか？』などと思いつつ、首を傾げる。

「…………結局、あいつは何が言いたかったんだ？　っつーか、やっぱからかわれただけか？　それとも単純に嫌われてるだけか。どっちにしろくnamonじゃねえな」

蒼い鳥 Blue Bird・(7) (後書き)

何かからかい方が微妙だったかもしれない。

哀がコナンだけに見せる顔といった感じを何となく感じとってくれば幸いです。

文章で表せボケという言葉を言われても反論できません。今回は本当に難しかった。

感想・評価お待ちしております。

蒼い鳥 Blue Bird・(8)(前書き)

コナン視点です

蒼い鳥 Blue Bird・(8)

正直、幾分か哀の様子は前に比べると明るくなったと思う。

前は地下に籠るのが当たり前で、軽く引きこもり状態だった。もちろん弱気な学生が学校でいじめられて、学校へ行きたくないと思ってしまうような、そんな重い問題ではない。哀はあまり喋らない少女ではあるが、気が弱いという部分はあまり目立たない。どちらかというといじめられて疎外されるよりは、単純に近寄りがたいだけで、話せばいいヤツだとすぐに分かるから、一度でも話せば哀をいじめようなんてヤツは現れないだろう。それ以前に小学一年生がいじめなんかをした日には日本は終わるだろう。

哀が引きこもる理由は『組織』に関係するのが大体だ。

組織の人間が近くに現れたり、組織の人間が自分の命を狙っているのではないかと。それだけを疑うだけで、哀は阿笠邸の地下室へと逃げ込む。

だが、今はこうして少年探偵団の皆と外を歩いていても笑ってられるぐらいの余裕が哀の中に戻っていた。それはいいことだろう。しかし、逆に言えば、少なくとも今現在哀の周りに組織の人間がいないということになる。

哀とコナンはそれぞれあらゆる危機を体験してきた。その経験からある特有の気配を感じ取ることが出来るようになっていた。

全身にまとわり付く氷のような、じわりじわりと手首、足首を掴んで離すまいとする生きた鎖のような、心臓に抉り込んで心臓を掴んで握り潰すような黒い手のような、そんないくらかでも例えることの出来る、異様な感覚。

二人はこの感覚を、

——黒の気配、そう呼んでいる。

かつて、戦ったジン、そしてベルモットからもこの感覚を味わった。

それは黒の人間であれば誰もが持ち合わせている気配。殺気とはまた違う、気配。

しかし、ジンとベルモットはその気配が他の一人よりも圧倒的に強い。哀はその二人の気配を他の誰以上に怖がっていた。

コナンは少年探偵団の中に混じって口元に手を当てながら笑っている哀を見る。

「俺の酒屋に新しいお客さんがいてよー。それがすごい美人なんだぜー。確か新しく出来たバーの店長なんだってよ」

「それって『カクテルバー・米花』っていう新しく米花町に出来たカクテルバーのことですか？ 元太くん」

「おうよ」

「あ、その人なら歩美、知ってるかもしれない。すごい美人でかつこいいんだよねー。憧れちゃうなー」

「そうなの？ でも、歩美ちゃんなら心配しなくても大きくなればすごい綺麗なお姉さんになれると思うけど？」

「うー……。でもでも哀ちゃん。ほら、コナンくんってあの歳で年上のお姉さんが好きじゃない？ だから歩美的にはコナンくんが振り向いてくれるようなお姉さんになってる頃には、コナンくんはもとと、もーっと年上の今のお母さんぐらいの人を好きになってるかもしれないし」

「あー……。あー……。あー……」

「あれ？ タナちゃんももしかして知ってた？ コナンくんが年上好きだって」

「うん。すごく」

……。一体何の話をしているのかは分からないが、とりあえず重要なのは哀が笑っていることなので無視することにした。少年二人がこちらを何故かガン見してきたが、無視することにした。

やはり笑っている。にこやかに。とても楽しそうに笑っている。

それは哀の周りが“平和”だという証だった。

気配にビクビクと震え、自分の世界に逃げ込むよりよほどマシだ。(っつかし……それじゃ困んだよね……。いや、何か事件が起こってほしいとかそんなんじゃないやなくて、俺の周りって何か妙に事件が多い気もすんだけどさー)

コナンが出かけると事件が起きる。しかも、自殺に見せかけた殺人事件や密室殺人事件などサスペンスドラマも涙目になるほどの、大事件が。これはもう呪われているとしか思えない。

けれど、そのどれもが『組織』とは何の縁ゆかりもない私怨による殺人事件ばかりなので、コナンとしてはせめて少しぐらい組織に関係していればいいのにな、と。本当に少しだけ思ったりもする。

「……不謹慎か」

わずかにでも事件が起きて、組織に繋がって欲しいと思ってしまった感情を、ぶんぶんと首を真横に振って吹き飛ばす。

いい加減、一人でいるのが寂しくなったコナンは、急いで談笑の輪の中に走っていく。

その横を、真っ赤な『FD』が駆けていくのにも気づかずに。

蒼い鳥 Blue Bird・(8) (後書き)

次回はあの二人の刑事が登場。

感想・評価お待ちしております。

行間 一 (1) (前書き)

佐藤視点です。

行間 一(1)

東京という街は平日であろうが、人が常にごった返していた。

東京という街が特別かどうかは分からないが、街の中の人間は普通の会社員や学生、それらに混じって会社員とも学生ともとれない人間が大勢駅前を歩いていた。

一台のアンフィニはそんな雑踏の中をゆっくり走っていた。

『FD3S型』

販売期間が一九九一年から二〇〇二年までという短い期間で販売していたマツダ開発の乗用車。殉職した刑事である父親から受け継いで、未だにこの型の少し古い車に乗り続けている所有者は運転席に乗っている女。

通称『FD』と呼ばれる真っ赤な車の中には二人の人間がいた。運転席に女の人が。助手席に男の人が座っているという、普通の力ツプルとしては少しだけ珍しい取り合わせだ。

それもそのはず、中にいるのは『警視庁刑事部捜査第一課強行犯捜査三係』の刑事だ。運転席に座っているのが佐藤美和子さとうみわこ警部補。助手席に座っているのが高木涉巡査部長。たかぎわたる階級的にはやはり警部補の方が偉いので、普通運転をしているのが高木であるはずなのだが、佐藤は運転自体が好きなので、階級うんぬんを無視して自分で運転をしている。

平均的な女性よりもやや背が高く、黒髪のショートカットをしている。可愛いというよりは綺麗と呼ばれるはずの彼女だが、警視庁内では自分では気づいていないが他の同僚（男性が主に）からは偶像アイドル崇拝的扱いを受けているので、やはり可愛いと呼ばれることが多い。

『警視庁刑事部捜査第一課強行犯捜査三係』は刑事部の中でも人使いが荒いことで有名だ。『第一課強行犯捜査』という場所の刑事は主に傷害や殺人などの事件を扱う係りで、警察内では『エリート組』

とも呼ばれる部でもある。

（はあー……いいわよね、平日のこんな時間から家に帰っている人たちは。私たち警察は家に帰る時間が決まってないから、ゆっくり出来る暇なんか分かりゃしない）

公務員なのに刑事という特殊な職業ならではの愚痴を零しながら佐藤はハンドルを切る。

大体の人間がそうだろうが、佐藤は自分が汗水垂らして働いているのに、コンビニ袋の中に缶ビールを入れて帰っている人間を見ると、無性に腹が立つ。残暑も残り、コンビニの袋がキンキンに冷えた缶ビールの霜が張っているのを見ると、どうしようもなくなってしまう。定時をとくに過ぎ、人ごみの街中を車で走っているのは、理由がある。

「あの……、すいません。聞こえちゃってます……」

「ん？ いや、別に高木くんを責めてる訳じゃないけどさ。ビールが飲みたいなあって」

佐藤は一度だけ助手席に座っている高木を見ると、すぐに前を向きなおしてハンドルを握りなおす。

「僕が傷害事件の犯人をみすみす取り逃すハメになっちゃって、本当に申し訳ないと思ってます」

「そんな謝らないでよー。何か私が高木くんを責めてるみたいじゃない。何？ もしかして、私、悪者？」

「そそ、そんな訳ないですっ！ はいっ！！」

意地悪っぽく笑ってみせる佐藤。佐藤の冗談に本気になって首をぶんぶんと横に振る高木。

他人から見ればいい関係の『相棒^{コンビ}』に見えるのかもしれない。上下関係がはつきりと分かれていて、それでいてその関係を互いが心地よいと思えるような、そんな最高の関係。

しかし、彼らのことを知っている人間からすれば『煮え切らない相棒^{コンビ}』に見える。別に二人の関係がギスギスしているとか、二人の信頼関係は仕事上のモノだけで、実際はもの凄く仲が悪いとか、そ

ういう話ではない。

警視庁内部、というか、佐藤美和子を偶像崇拜アイドルしている、佐藤の合コン参加という条件だけで奈落の底でも極寒の地の張り込みを安請け合いすることでは有名（部内のみ）な『美和子ちゃん親衛隊』の人間なら、すでに全員が知っている噂が彼らを『煮え切らない相棒』コンビとしている。

その噂とは、

——二人は既にキスを交わしている。

そんな噂が流れている。

実際、その噂がデマかと聞かれれば、答えは、否、である。

しかし、そのキスがロマンチックだったかと聞かれれば、それもまた、否、である。

高木が追い詰めた殺人犯に奪われた拳銃で心臓付近を撃たれて、高木が病院に担ぎ込まれた際に、佐藤が眠ったままの高木の唇に自分の唇を重ねた。それは確かにキスと呼べるものだった。唇の柔らかい感触も、確かにキスだった。

だが、それをロマンチックと呼んでしまうと、それはまた違う問題な気がする。

「しかし、犯人を取り逃したなんて、始末書だけで済めばいいけどね」

「な、何で人事なんですかー！」

「だって、人事だしー」

「そ、そんなー」

そんなどうでもいい会話をしていると佐藤は一〇メートルぐらい先にバイクに乗っている人間を見た。

上から下まで真っ黒に染まったライダースーツに身を包んだ人影は、所謂中型バイクと呼ばれる原付などと比べると一回りか、ふた回りほど大きいバイクに乗って、道を走行していた。バイクスーツ

に合わせて調達したのか、真っ黒に染まったヘルメットから短く纏められた金髪がわずかにはみ出していた。金髪は無理矢理染め上げたというよりは生まれたときから金髪だ、というようなブロンドでよく見るとハンドルを握っている手も日本人らしからぬ、雪のような白い手だった。その手の指の細さから見て、バイクに乗っているのは女のようなのだ。

（……外国人の女？）

佐藤は外国人を初めてみるような鎖国人間ではない。それなりに外国人とは面識がある、どちらかというところ社交的な人間だ。そのどれもが殺人事件の関係者や容疑者であるという刑事らしい括りはあるが。

女のライダーは佐藤に気づいた様子も見せずに、街中をバイクで駆け抜けていた。自分の格好がいかに街中に溶け込んでいないのかも分かっていないように、堂々としていた。

「珍しいですね……こんな時間に。釣り……ですかね？」

高木も佐藤と同じライダーを見ていたらしく、そんなことを隣で呟いた。

確かに女のライダーは背中に直径一二〇センチほどの大きさの筒状の、まるで釣り道具の竿入れのようなモノを背負っていた。佐藤は自分の右手にはめた腕時計を見る。

（一七時半……か）

現時刻、十七時三一分。

釣りをしにいく時間にしては遅い、ということはない。朝に釣りをしに行く人間がいるように、あえて夜に釣りをしにいく人間だっている。朝ならまったく釣れないが、夜であれば釣れるといったような、そんな釣りセンスの人間は当然、大勢いる。夜釣りという言葉もあるくらいだ。だから何の不自然さもない。

佐藤は車の窓を開けて、空を見上げた後、ゆっくりと女ライダーの隣に車を走らせた。

「どうも。何か空すごい晴れてるけど、釣れるの？」

声に女はゆつくりとこちらに視線を向けた。

高木が『ちょ、ちよつと佐藤さん何してんすかーっ！』と慌てていたが佐藤はそれを無視して、女に話続けた。

「というかどこに釣りに行くの？ 東京都内でいいポイントなんかあったっけ？」

女は一度だけこちらを見ただけで受け答えには応じようとはしない。ヘルメット越しのアイガードから覗く左目は佐藤を捉えているが、何も答えない。

「……………日本語ちゃんと通じてない？ 外国の人？」

相変わらず女ライダーは答えない。そして佐藤は何も喋らないのに女の口がくちやくちや、と。何かを噛んでいるように動いているのに気づいた。

風の音でほとんど掻き消されているが、その音はガリ！ ガリ！
！ と言ったような、ガムのような甘味を噛んでいるだけでは絶対に聞こえない異音をわずかに発していることをなんとか聞き取るこ
とが出来た。

（……………この勘、もしかしたら当たってるかもしれないわね）

佐藤のこの判断は全て『刑事』としての勘だけだった。つまり確証も証拠も推理もない、ただの妄想。間違っていました、と、それだけでは済まない『刑事』の勘。しかし、それだけのことを判断させてしまう“ナニカ”を、佐藤はこのライダーから感じたのだ。

「日本語通じないならいいわよね……………」

そう言って佐藤は自分のポケットに手をつ込む。

（これ無闇に出すと、始末書モンだけど。高木くんと一緒ならいいかも、ね）

取り出したのは警察手帳。日本人であればそれを突きつけられるだけで緊張してしまうような代物。

「私、警視庁の刑事なんだけど。ちよつと話聞かせてもらえるかしら？」佐藤は視線を女の顔から左足へと向ける。「特にその“左足

ふともも付近”のお話。興味あるな」

女の左足のズボンは少し膨らんでいた。一五センチほど、不自然な膨らみ方をしていた。

高木もそれに気づいたのか、「わっ!？」と声を荒げて驚いた。

ライダースーツのようにぴっちりとした服装だったから、その正体はすぐに分かった。

——女の左足の膨らみは、まるで拳銃の様な形をしていた。

行間 一(1)(後書き)

ちよっと思っていたよりも長くなったので分割します。

感想・評価お待ちしております。

行間 一(2)(前書き)

佐藤視点です。

行間 一(2)

佐藤が乗った『FD』と女ライダーのバイクは赤信号のため、一度停車した。

「とりあえずヘルメット脱いで、顔を見せてくんないかな？」

他の車も停車している道路の真ん中で佐藤はそんなことを言う。

高木に後ろ手で指示をする。

『私の後ろに隠れて拳銃を構えて』

そう指示を出した佐藤は自分の体で高木を隠すように体を移動すると、高木は自分の制服の内側の拳銃ホルダーから、拳銃を抜き取って、決して女には見えないように拳銃を構える。

「本当に日本語分らない？ 私、警視庁の佐藤美和子って言うの。貴女が拘束される理由ぐらいは分かるでしょ？」

相変わらず女は答えない。

本当に日本語が分からないのか、と。佐藤が訝しげに女を睨んでいると、女はゆっくりと視線を佐藤、ではなく。後ろの高木に投げた。

見えた。恐らく見えたのだ。佐藤の後ろで高木が拳銃を構えている、その姿が。

そのことに気づいた佐藤が警戒するように体を後方に引くと、

——女は意外にも、ヘルメットをあっさりと脱ぎ捨てた。

「……、」

意外と言えば意外と思う行動に佐藤は思わず、カラカラになった息を呑み込む。

両者の距離はわずか一メートル弱。

佐藤は目の前の女に視線を向ける。

見るからに異様な女だ。中途半端な長さに切られている金髪はヘルメットが脱げたことにより風になびく。外国人特有の整えられた顔立ちは、まるでフランス人形のように端整された印象を佐藤に一

目で与えた。

しかし、その印象を吹き飛ばしてしまうほどの特徴はその肌と左目の周りに彫られている黒いアゲハ蝶のタトゥー。

年は二〇代後半ぐらいだろうか。本来ブロンドと言われるような美しい金髪は手入れをまったくしていないのか、所々が獣のように跳ねている。まるで白磁のような肌もよく見るとガサガサで、美白美人というよりは病弱とも言えるような陽の光をほとんど浴びていないような病氣的な白さだった。確かに目の前の女は美人だった。しかし、美人とはいえ、女はどこか古錆びた印象を与えた。何というか、使い古したフランス人形——捨てる直前のフランス人形のような汚らしさが、女の全てを台無しにしていた。

「ヘルメットを脱いだってことは……日本語がちゃんと伝わっている証拠よね？」

金髪の女は佐藤の言葉にやはり、何の反応も見せない。

やはり言葉が通じていないのか、それとも単純に無感情なのか。

女は首を横に振り、周りの人間たちの動きを見る。

何かを警戒している、と。佐藤が女の視線を同時に追って、女から一瞬目を離す。

たっぷりと五秒もかけて、女はゆっくりと視線を佐藤に戻し、「予定通り。……思ってた通りに事が進みやがる。愉快だなア、おい？」

女の印象が一瞬で変わる。明らかに侮蔑の含んだ声。しかし、それでいてその声は佐藤に投げかけられたモノではない。女は佐藤が視線を完全に自分に向けるより前に、自分のライダースーツのポケットから、——左足の拳銃とは別の拳銃を取り出した。

——瞬間、バン！！という乾いた銃声が街中に響き渡った。

両者との距離は一メートル弱しかなかった。腕を伸ばして拳銃を

撃てば、それはほとんどゼロ距離になる。だから、佐藤もその瞬間、確かに、撃たれた、そう思った。

拳銃を撃たれば、それは絶命した、そう思うものだ。

だが、拳銃の弾は佐藤には当たらなかった。だから、佐藤が悲鳴を上げることなかった。

その代わりに聞こえたのは、

「――ぐ――ッ」

高木の喘鳴。ぜんめい

拳銃を構えて緊張状態であつた高木は女の一瞬の行動に、咄嗟に反応することが出来た。拳銃を握つたまま、高木は佐藤の体を窓より低く押し込み、佐藤の身を庇つた。しかし、自分の体がわずかに窓からはみ出ていたことにより、女の放つた拳銃の弾が高木の肩を掠めた。

掠めたとはいえ、それは激痛にも近い衝撃だつた。それは痛みを押し殺そうとしている高木の喘鳴が証明している。

「だ、大丈夫、高木くん！」

「だ、大丈夫です。……か、肩を……肩をちょっと……掠つただけですから」

殺すつもりで放つた弾丸が外れたことに女の顔が明らかに歪む。

それは一瞬の出来事であつた。

一瞬の後、街中の人間は悲鳴や怒号を上げながら、建物の中へと逃げ込んでいく。車に乗っていた人間もこの渋滞では車で逃げ切ることが出来ないと悟つたのか、車をその場に乗り捨てて、建物の中へと駆けていく。

街中に銃声が響き渡つたのだ。当然の結果。

しかし、それにしても街中の人間の行動が早すぎると女は怪訝な表情を浮かべる。

彼女は知らないのだ。米花町という町が他の町とは違い、少し特殊であるということ。

半年という短い期間で何十、何百という数の殺人事件が起きたこ

とがある米花町は他の町と比べて、危機感が強い。それはとある少年のせいだとか、元へば刑事の名探偵のせいだとか、そんなことを言われてはいるが、今はそんなことどうでもいい。

問題はものの三〇秒もしない内に人で溢れていた駅前的大通りから人影が消えたことだ。

これは女も想定していないことだったのか、わずかに舌打ちをする。

が。

(な……っ……、)

女はこの光景を眺めて、それでも笑っていた。仮面にナイフを突き立てて、無理矢理笑顔を作り出した不気味な顔で、横に引き裂いた唇が伸びるみたいに、笑っていた。

この状況を想定していた佐藤の方がかえって驚いて、一瞬の判断が遅れ、

そして、不意に、女が乗っていたバイクが猛々しいエンジンを噴き始める。

「しま——ッ!!」

言うよりも先に女はその場からバイクで逃げ出した。

佐藤は女の言動にいちいち驚いている暇ではなかった。高木を手席に傷が当たらないようにゆっくりと座らせると、慌ててアクセルを踏んだ。

(普通ならこの場合、応援を要請して、出来ることなら逃走経路を全て封鎖して、更には人が多く通る道を厳選して、まるで元々逃げ道を用意していたように、バイクを走らせている。いくらこの地に時間をかけると逃げられる恐れがある。それに……)

佐藤は拳銃を所持した女を見失わないように、しっかりと睨み付けながら呟く。

女はこの地域の地理の知識でもあるのか、器用にバイクが逃げやすい道を選んで、更には人が多く通る道を厳選して、まるで元々逃げ道を用意していたように、バイクを走らせている。いくらこの地元の『刑事』とはいえ、ここまで逃げ道を用意していた女に対して、

急に追いつくことなど不可能だ。本来、このような事態に陥ってしまった場合、やはり応援を呼ぶのが最優先なのだろう。……それに佐藤はゆっくりと視線を高木に向ける。

高木が手で押さえた肩からじわじわと赤い液体が滲み出ている。本来茶色のスーツの色が泥水のように腐食している。高木は肩を掠めただけだと言っていたが、本当はわずかに肩の肉片を削り取ってしまったているのかもしれない。

（思ったより……高木くんの傷が酷い。でも、相手は拳銃を所持している、最上級の要注意人物。このまま逃がすと、被害者を出してしまうかもしれない）

そこまで結論出して、

佐藤はそこまでの判断をして、

—— ゆっくりと車を路肩につけた。

高木は今も激痛で悲鳴を押し殺すことで精一杯のようで、車が止まっていることにさえ気づいていない。それを見て、佐藤は自分の判断が決して間違っていないと確信した。

佐藤としては目の前の怪我人を放って、容疑者を確保していく、なんてことは出来ない。もし仮に佐藤が高木を放って、危険人物であるあの女を確保出来ても、佐藤としては目覚めが悪すぎる。だったら、今すぐにでも車を止めて、救急車を呼んで高木の治療を優先した方がマシだった。『刑事』としては失格なのだろうが、佐藤はその方が一〇〇倍も一〇〇〇倍もマシだった。

（……毒されちゃったかな……？ この甘い刑事さんに）
車を止めた佐藤は車から一度出て、携帯電話で救急車と警察を呼んだ。

そして、空を見上げながらそりと。

「それにしても……あの女。何を噛んでいたんだろう……？」

小さく呟いて、車に戻った。

行間 一（２）（後書き）

このシリーズ初となります、二人の刑事が出てきました。

二人の関係性などはどうだったでしょうか？ 正直作者は哀ちゃんと服部が好きなので、あまりこの二人に思い入れが正直ないんですよ。

けど、嫌いではないので。いい関係を書ければなと思います。

感想・評価お待ちしております。

蒼い鳥 Blue Bird・(9)(前書き)

コナン視点です

蒼い鳥 Blue Bird・(9)

空の色はオレンジからいつの間にか紫色に変わっていた。

歩美、元太、光彦たちと別れたコナンたちは同じ帰路をてくてくと歩いていた。

コナンたちはそれぞれ、『アボトキシAPT×4869』を吞まされて幼児化しているという『事情』があるため、その『事情』を理解し、その『事情』を絶対に誰にも洩らすことのない理解者が必要である。

その理解者というのが阿笠博士という一人の男だ。

哀は元々、阿笠の家に居候していたが、コナンとタナは毛利小五郎ろの家に住んでいた。しかし、今は小五郎が家にいないため、コナンとタナも阿笠の家で居候させてもらっている。

(……おっちゃんからはあれから連絡こねーし、このままずっと博士ちん家に世話になるってのものなー)

新一時代から阿笠と仲が良かったコナンとしては阿笠をただの隣人と呼ぶよりは歳の離れた友人と呼ぶ方が正しいのかもしれない。

だからこそ、コナンとしては反対一つしなかった阿笠に対して、感謝以上の謝罪の感情が浮かぶ。

「いつになったらお父さん帰ってくるんだろうね」

右隣を歩くタナがそんなことを言う。彼女はいつもこの時間帯になるとコナンにぼそりとそんな弱音を吐き出す。これは希麻タナという少女が生まれてからの日課のようなものだ。それもそのはずだろうが、タナは小五郎の娘で、更にはその小五郎が娘を捜すために家を飛び出した原因うそを作り出したのが自分のせいだと思い込んでいる。タナの場合はその原因の一〇〇パーセントが自分のせいだと完全に『思い込んでいる』ので、コナンがいくら『お前のせいじゃない』と言っても聞かない。思い込みというモノはタチが悪く、一度思い込んでしまうと、他の誰かが何かを言っても聞こうともしない。タナの弱音を吹き飛ばすことが出来るのは、小五郎本人による『喝』

ただだろうが、それは無理だ。この状態のタナを蘭と見極めることなど出来ないだろうし、小五郎ではここまでたどり着けない。……いや、きつとシャーロックホームズでさえ。

「まあ……おっちゃんだって、いい大人なんだから、そんな心配しなくても無茶はしないだろ？」

「それは……そう、だけど……」

「案外、どこかのお姉ちゃんと仲良くやってるかもしれないぜ？」

コナンはあくまで冗談で、タナの心を解きほぐそうとしただけで、悪気はない。

「……………」タナは無表情に固めた瞳でコナンの顔を見た。「ほほう」

「あ、え？　蘭？　もしかして……怒ってる？」

コナンは瞬間的に、もしかして地雷踏んだ？　などと呑気に考えていた。

「別に怒ってないよ？　ただ……どうしてそういうことを簡単に言ってくれちゃうのかなー？　この推理オタクは……。お父さんにはお母さんがいるの。分かる？　妻、奥さんがいるの。妻子持ちなの。もういい年のおっさんなの」

「あー……ごめん、冗談。怒ってる？」

「だーからー、怒ってないって言ってるでしょ？　新一は……もしかして『悪気』がなければ何でも許されるだなんて子供の発想に蝕ほじむまれているのかな？　あはは」

「……………」

即座に土下座でもしてタナの機嫌を取り戻そうとするコナンだったが、いつの間にか掴まれた肩に少女の指がギリギリと食い込んでいた。につこりと聖女のような笑みを浮かべながら、瞳の奥は語る言語道断しなとのことらしい。何か久しぶりだなーこの反応あつはつはー、などと半ば現実逃避気味にそんなことを考える。

と、

「あら？　ホームズ？」

……さつきからずっと、二人の光景を喜劇でも見るかのように静観していた哀が不意に声を漏らす。

何事かと哀の視線を追うと、住宅街の塀の上を器用にとてとてと歩いている黒猫がいた。

その黒猫は確かに、以前哀が、怪我をしている所を拾って治療してあげた黒猫に体型がよく似ていた。よく似ていた、なんて曖昧な表現をするのはその黒猫が確かに、以前『ほりゆう』などと猫としての存在をぶち壊すような名前を、ネーミングセンスのカケラもない哀が付けようとしていたのを、全力で阻止して『ホームズ』とコナンが名づけてやった黒猫に似ていたが、その黒猫が住宅街という他の猫もたくさんいる中の一匹に過ぎないので、どうにも判断出来ない。

それは哀も同じなのか、哀は静かにその黒猫に近づいていく。

彼女は黒猫の前に立つと、コナンたちの方をチラチラと見てきた。コナンはその意味を深く考える必要もなく理解した。灰原哀という少女は、本当は目の前の黒猫の頭を思いつきり撫でて癒されたいのだが、流石にそこまでのことを、他人が近くにいる時にやる勇氣はないらしい。『クール』で通っている少女が『実はとっても寂しがり屋の動物愛護家』などというレッテルを貼られるのは、『なんとなく恥ずかしい』から自分でも嫌だとか言っている。……もう隠し切れていないと思うのだが。何というか他人が勝手に張ったレッテルを馬鹿正直に気にしている少女に対して、コナンは素直にいたたまれなく思う。

「あー、はいはい。んじゃ、俺たちは先に帰ってるぞ」

明らかに可愛い黒猫を前にそわそわしている哀に対して、これ以上言葉を重ねるのは一種のイジメになってしまう気がしたコナンは哀の返事を聞く前に、タナと一緒に角を曲がって哀の前から消えていた。

蒼い鳥 Blue Bird・(10)(前書き)

コナン視点から、最後に哀視点です。

蒼い鳥 Blue Bird・(10)

一方その頃、コナンとタナの二人は、阿笠低に帰るために、夕方の路地を歩いていた。

そういえば、コナンとタナが二人きりで、黙って家に帰るのはこれが初めてだったりする。

コナンが新一の姿の時は、よくタナ、と言っても元の姿である蘭とだが、こうやって帰り道を歩いたりしたものだ。それはほとんど習慣染みたモノだったので、学校や帰り道が何かで喧嘩をしても、口は一切利かないが、黙ったままでも一緒に帰るという、幼なじみ独特の『よく分からないが別に変でもない』と感じていた妙なルールがあつた。新一と蘭の同級生からは『何で喧嘩したのに一緒に帰ってたんだ』と聞かれたが、『別に帰る道が一緒だから』としか答えようがない。……未だによく分からない話だ。

そういう訳で、コナンとタナは久しぶりの同じ帰り道を歩くという、久しぶりの帰り道にコナンは多少だがドギマギしていた。

(……何かこうして、蘭と一緒に帰るの久しぶりだな……、って。おい、久しぶりって感じるってどうなんだ？ 若者にとって半年ってどんぐらいだ？)

ぼんやりと頭の中で考えていたコナンだったが、不意に背後から『きゃー——！？』という謎の声が聞こえてきた。

その声は明らかに悲鳴ではない。どちらかというと男性アイドルを目の前にした『Tha女子』みたいな黄色い声だ。

「アイツ……あれで、隠してるつもりか？」

どんな仔猫の攻撃しぐさにやられたのかは分からないが、そこまでの大声を出しておいて、『なんとなく恥ずかしい』とか言うのはどうなんだろうと、コナンは思う。

「たはは……、仕方ないよ。哀ちゃんにだって好きなことが一つや二つあるんだから」

ホームズを語っている時の新一と同じだよ？ と、タナは隣を歩
きながらぼそりと呟いた。

「……やっぱ、怒ってる？」

彼のか細い声を聞いたタナは、ジト目でコナンを睨みつつ、

「……殴りたい？」

菩薩様ぼさつのような笑顔を前に、コナンはぶんぶんと首を思いつきり
カクテルシェイカーのように横に振る。よく見ないと分からないが、
コナンの顔にはうつすらとだが、流れ落ちない程度の涙が浮かんで
見えた。

タナは不承不承といったように、小さく息を吐いて、

「……許す」

……ふえ？ と、コナンは今にも泣き出しそうな子供が母親の優
しい声を聞いた時のような安堵に満ち溢れる表情を浮かべる。

「そんなに泣きそうな顔、っていうかコナンくんの顔でそんな顔さ
れるとこつちとしては罪悪感が半端じゃないから、許す」

基本的に毛利蘭という少女は優しいというよりは甘いという人間
で、子供が泣きそうな顔をしているのに黙って自分の我がを貫き通せ
るほどの、我が侂でもない少女だ。

「だからもう殴らないって言ってるでしょ！ いい加減私との距離
を取るのをやめなさいよッ！！」

詰まるところ、毛利蘭はお人好しなのだった。

コナンが蘭との距離をわずかに開けていたのは、何も蘭にぶん殴
られることを恐れるという動物的行動ではなく、久しぶりの二人き
りの登下校が何となく気恥ずかしいから、という人間的行動である
ことに、どうやらタナは気づいていない。何というか、コナンとし
ては損と呼ぶべきか得と呼ぶべきか分からない結果に、可愛らしく
とてとてとタナの横に少しだけ近づいた。

ようやく安心して話が出来る状況にコナンが心の奥から安堵して、
何かを話さなければと頭の中で何を話そうかと決めて、

「蘭ってさ——」

タナもその答えを優しい笑みで待っていると、

「――もしかして、シヨタコン？」

コナンの顔面に思いつきりタナのぐーぱんちがめり込んだ。
ぐるぐるぐる、と。コナンの小さな体がボールのように地面を転がる。

『うばぁ……』というコナンの瀕死の声が聞こえるものの、タナはそんなことに構っている暇さえないように、ゼーはーゼーはー、と肩どころか全身で深呼吸をして、

「ど、どうしてそうなのよっ！」

「い、いやだって！ 俺だったら許さなくせにコナンだったら許すとかおかしいだろっ！？ っていうか何でそんな顔を真っ赤にして怒りますかーッ！！」

「そりや怒るでしょうが。私がこれ以上新一の泣き顔を見たくないと思つて、心を落ち着けてようやく『許す』って言ったのに、新一ったら、何！ シヨタコン？ 言うにことかいて、アンタは何言つてんだ！！ 何言つてんだ！！」

「いや、別にシヨタコンだつていいじゃねえか。ほら、シヨタコンつて響きが何か嫌なんだろ？ だったらこうしねえか？ 無類の子供好きとか、子供に目がないとか」

二発目のぐーぱんち。

こんな感じでコナンとタナの二人は顔を合わせて、口論（タナは自分が不利になると手を出す）を続けながら、家路を歩く。

その頃、哀は未だに家路途中の塀の近くで仔猫と遊んでいた。

仔猫が動くたびに、息をするような小さな拳動に、頬に両手を当てて『きゃー！ 何この子、この子可愛すぎるでしょー！！』と心の中で絶叫している。

あくまで心の中で絶叫しているだけなので、他の通行人にはそれが、『仔猫を見たまま、ずっと動かない不審人物』にしか見えない。
（はぁー……可愛いなあ……何で動物ってこんなに可愛いんだろう。特に仔猫。これはもう仔猫じゃなくて、天使、そう、天使と呼ぶべきよね。アメリカンショートヘアの仔猫を初めて見たときの衝撃は今でも忘れないわ……）

うつとりと仔猫を見ていると、不意に空から「カー」というカラスの鳴き声が聞こえた。

（——って……、もうこんな時間？）

時間もすっかり忘れて仔猫に集中してしまうようでは科学者失敗だと、哀は近くに誰もいないことを確かめて、顔を赤くしながら、こほん、と。小さく咳払いをした。

（彼……上手くやってるのかしらね）

夕焼けに燃えた空を見ながら哀はふと思う。

彼がぼこぼこになっているのも知らずに、——無邪気に。

蒼い鳥 Blue Bird・(10)(後書き)

蘭の体が幼児化したことにより、当然、力が弱まっています。なので、あくまで蘭の暴力は『ツツコミの延長線上』です。照れ隠しなどで暴力を振るう頃の蘭ちゃんが好きでした。

感想・評価お待ちしております。

蒼い鳥 Blue Bird・(11)(前書き)

コナン視点です。

蒼い鳥 Blue Bird・(11)

江戸川コナンは今日一日だけで一体何回殴られたかを忘れてしまった。

別に顔というか頭と呼ぶべき場所を何回も殴られて記憶がぶっ飛んでしまったとか、そういう話ではない。何というか数えるのがバカらしくなってきたのだ。

女性は口喧嘩が得意というが、タナの場合は少し違った意味で“強い”ということが分かったコナンは、とりあえず彼女に対しては無条件で土下座をするべきだと学んだ。

彼女の悪癖は都合が悪くなると、とりあえず何も考えずに殴ると同時に、人を殴った後では顔を真っ赤にしてへこむといったところだろうか。

「あの……確認するけど、被害者って俺だよな？」

「うう……、」

人を簡単に殴ってしまったという罪悪感とそもそもどうしてこんなくだらないことで喧嘩してしまったのか、という虚脱感が合わさって、タナの気力はほとんど死滅している。

ずーん、と彼女の周りの空気だけ一〇キロほど増加しているように、タナの足取りが重くなっている。

「おーい……」

コナンが流石に心配になって声をかけてもほとんど反応しない。どうやら完全に落ち込みモードに突入しているらしい。

「俺なら大丈夫だから。いくら子供に殴られたってへでもないってーの」

「で、でもでも」

「あのなあ……俺が一体何年お前の幼なじみやってると思ってんだよ。お前が俺以外のヤツにやってるんだっただらそこまでへこんでも構わないけどさ、俺にやるときぐらいいは遠慮すんなよ。それが幼な

じみってモンだろ？」

コナンの言葉にタナはゆっくりと顔を上げて、

「……なんか、そこはかとなくバカにされてる気がする……」

落ち込みモードの彼女はどうにも卑屈なようである。

でも、と彼女は一回そこで言葉を切って、

「……ありがとう」

しおらしく頭を下げる。

「……………おう」

夕焼けの赤のせいなのか、コナンとタナの顔が真っ赤に染まっていた。

何というか、こういう反応をされると非常に困る。恥ずかしさがハンパじゃない。これなら人が大勢謳歌する駅前で、思いつきり大声で叫んで奇異の視線を集中砲火された方が一〇〇倍マシだ。

とりあえずこの空気をどうにかしたい。マンガやアニメといった娯楽作品であれば、今、コナンとタナの周りには淡いピンク色の、更には、黄色や薄い水色といったようなポップ系の水玉が浮かんでいるラブコメ背景が描かれているに違いない、ものすごく恥ずかしい空気をどうにかしたい。

「あ、あー！ あれだ、うん！ 話題変えようぜ」

自分で言っておいてなんなのだが、自分から話題を変えるとか言うなよと思う。しかし、この空気には正直耐えられない。

「そういえば、お前志保のヤツに俺の様子がおかしいって伝えたいだな？」

「哀ちゃんに？」

「おう。志保のヤツが言ってたぜ。お前から『俺の様子がおかしい』ことを聞いたって。アイツは思いつき俺をからかうための口実にしてたけど」

タナはコナンの言葉を受けて、何となく小首を傾げているのが分かる程度に、頭を動かし、

「確かに……新一の様子が変だって分かってたけど……」

「流石幼なじみって所だよなー。俺、自分でも気づいてなかったけど、落ち込んでたのかもなー」

「……………」

何か深く考え込むように、タナは自分の顎に指を置く。

それは会話の続きの言葉を探している、というよりも。何か他のことを長考しているような、二人だけの会話をするにはあまりに不自然な動作。

「？ どうしたんだ、蘭」

「……えっと、いつこ、確認していい？」

「……何を？」

「哀ちゃんか……言っただの？ 私が新一の様子がおかしいんじゃないかって」

「え？ あ、ああ。アイツはからかい半分で俺を笑いに来たんじゃないかって思ってるけど。確かにアイツは言ってたぜ？ 俺の様子がおかしいのに気づいたのは蘭さんのおかげだってよ」

「……………」

今度はうーん、と明らかに声を漏らす。その表情は本当によく分からないといった様子で、

「……どうして、そんなこと言っただろ？」

「は？」

口の中で小さく呟くような声にコナンは首を傾げる。

「ううん、何でもない」

彼女はいつもの明るい声でそう言う。すると彼女はようやく顔を上げて、

「え、っ、とね、私。そんなこと哀ちゃんに言ってないよ」

「え？ でも、志保は蘭から聞いたって。お前が頼んだんじゃないのか？ 少年探偵団の子供たちの相手をしている間は俺に聞けないからそうしたんじゃないかと思ってただけだ」

タナは言葉に小さく頷いて、

「うん。確かに歩美ちゃんたちと話してたから新一に声をかけることが出来なかったよ？　だから、一度家に帰ってからその話をしようと思ってたし」

「……だから、先に俺にどういふことが聞いてきてつて志保に頼んだんじゃないのか？　どうせ後で話を聞くなら事情を先に知っておいたほうがやりやすそうだし」

「ふふ、私がそんなに器用に見える？」

タナの顔を見る。

コナンは毛利蘭の幼なじみだ。嫌な所も良い所も腐るほど知っている、所謂臭い仲といっても過言じゃないほど毛利蘭のことを知っている。

だからこそ、分かる。

毛利蘭という少女は、見た目以上に不器用な少女だ。

どうでもいい嘘を吐くことでさえ、躊躇ためらいしてしまうような、とてもない嘘を大切な父親に吐いた時はみつともないほど泣いた。そんな彼女を果たして、器用な女と言えるのだろうか。

答えは、否。断じて否だ。

少女はどこまでも真っ直ぐで、どこまでも繊細で、たった数日知り合っただけの知り合いが、もし事故か何かで死んでしまったとしても、彼女は膝を付いて一日中泣きじゃくる。そんな彼女はまったく器用には生きられない。目の前の問題が一つでも片付いていないのであれば、それを片付けなければ、前に進めない。後で出来るからといってその問題を放っておける、そんな器用な人間ではない。

だから彼女は『少年探偵団の皆と話す』ことを選んで、『幼なじみの工藤新一の心配』を後回しにした。

それは彼女らしいといえ、とても、らしい。

との、同時に。

彼女の不器用さの表れでもある。

タナが歩美たちから離れて会話をしなければ、子供たちが少しで

も悲しむのではないかと疑った時点で、タナは『幼なじみの工藤新一の心配』よりも『少年探偵団の皆と話す』ことを選ぶしか、不器用な彼女には出来ない。

コナンは、背後を見る。といつても路地の壁や、住宅街の塀などしか見えない。コナンが見たのは哀が追いかけてくるであろう道筋。それを見ることで哀の顔を思い出す。

そして、すぐにタナに顔を向ける。

「……私は、何も言っていないよ？」

私は。という所を強調するように、タナは告げた。

「……どうということだよ？」

「………」

タナは何故か答えなかった。コナンがちょっと奇妙に思っている
と、

「……かえろ」

いつもの幼なじみの顔でそう言った。

「………ああ」

そんな彼女に対して、彼はこう返すのが精一杯だった。

蒼い鳥 Blue Bird・(12)(前書き)

コナン視点です

蒼い鳥 Blue Bird・(12)

「みにゃー」

出迎えたのは生後一年弱の黒猫こと、ホームズだった。

阿笠邸は普通の家のように、いくつも部屋が分かれて、それぞれ寝室、個室、客室といったように小さな部屋がいくつもあるような豪邸ではなく、車の展示場のような大きなリビングにテレビやソファーなどといった日用雑貨を乱雑に配置した、それこそ日用雑貨の展示場のような印象の豪邸である。

その大きな家の玄関にぽつんという擬音が当てはまるように黒猫は鳴き声と共にコナンとタナを出迎えた。だが、コナンとタナしかないことが分かるとぶいっとすぐに部屋の中央に走っていく。

「何だ、ホームズのヤツ……家いえにいるじゃねえか」

「ほんとだ。じゃあさっきの仔猫は野良猫だったのかな？」

「あー……野良猫ってこういう飼われてる猫と違って本当に野良って感じなんだよな……野生満載っつーか、泣き声も愛嬌って呼ぶより威嚇って感じの。あいつ咬まれるか引つ搔かれてなきやいいけど」

なんとなく哀の心配をしつつ、コナンとタナは靴を脱いでテーブルが置かれている部屋の中央に向かう。

「あれ？ 博士はいないのか？」

辺りがある程度見回してみても、この家の住人権大黒柱である阿笠博士あがさ ひろしがいないことに気づいたコナンがそう言うと、

「でも……ビートルは停まってたし、地下室かどこかにいるんじゃないの？」

「んじゃ、俺ちよつと博士の様子を見てくる。志保のヤツももうすぐ帰ってくるんだろ？ そっちは任せたわ」

「うん」

ランドセルをテーブルの上に置いたコナンは阿笠邸の地下室へと

向かう。

阿笠邸の地下室は貯蔵庫のような物置のような感じで使うよりは、哀や阿笠の研究室のように使っている。なので地下室はどこかの研究所のように、高性能パソコンのケーブルやパソコンをインターネッ트에繋ぐための回線のケーブルなどが廊下の道の端に蛇のように何本も這っている。阿笠邸によく遊びにくる子供たちや歳をとった自分が足を絡めとられないようにケーブルは紐でくくり、何十本のケーブルを一本の大きな束にまとめている。……しかし、たまに寝ぼけながら歩いていると阿笠がこけてしまうので、壁の至る所がよく目を凝らして見ないと分からない程度にへこんでいる。

（……目立たないからって修理を怠ってきたけど、そろそろ修理しないとヤバんじゃないか……これ）

小さな傷とはいえ、これほど大量の傷を完全に直すとなるといくらかかるんだろう、とコナンが頭の中で一般的な業者の平均額を計算していると、

（お？）

阿笠がいつも使っている部屋の明かりが付いていた。

その部屋はいつも阿笠が使っている高性能のパソコンが置いてある部屋とは違い、コナンが阿笠に渡される発明品を開発している開発室だった。

中からは溶接工場の中のような音がしている。明らかに中に人がいる。

「何だここにいたのか」

中に入ってみると案の定、そこに阿笠がいた。

扉の隙間から漏れ出してくる音でほとんど分かつてはいたが、阿笠は何かを作成中のようで、他人が作った道具では満足出来ないという理由だけでほとんど自作した遮光メガネ（しゃっこうめがね）をかけて、何かの作業をしていた。

「うん？」

ようやく阿笠は誰かが部屋の中に入っていたのに気づいたのか、

遮光メガネを外すと扉の近くの壁にもたれかかっていたコナンの存在に気づき、

「おお、帰ってきていたのか新一。おかえり」

「おう、ただいま」

作業が一時中断したことに、コナンはやっと阿笠に近づくことが出来る。

「何を作ってたんだ？ 新しい発明品か？」

「いや。残念ながら新しい発明品ではないぞ。覚えておるかの？」

ワシが発明した『トロピカルレインボー』のことを」

『トロピカルレインボー』

コナンが知っている限りの知識は、老朽化した建物の爆発解体用の爆弾で、爆発する際に七色に光るから『トロピカルレインボー』と呼ぶ。説明すると何だか凄そうに聞こえるが、実際は爆発する時に発生する粉塵にアйдルなどのライブで大活躍するケミカルライトの塗料、シュウ酸ジフェニルと過酸化水素を混ぜて、シュウ酸ジフェニルと過酸化水素との混合溶液の化学発光により蛍光を放つ性質を応用しただけの、ただのケミカルライトの爆弾版だ。弱点は塗料の性質上、数分間しか発光しないことだが、爆弾であるが故にその弱点はほとんど関係ない。

「まあ……覚えてるけど、何でそんなものを作ってた？」

「海外におけるワシの古い知り合いがの、ワシの発明品を使いたいと言ってきたの。それでまた作り直しておるところなんじゃ。改良した『トロピカルレインボー』はすごいぞ。破壊力が前回の一・五倍は増加しておる」

「……なんか凄いいんだか、凄くないんだかよく分かんねー数字だな」

「……キミは本当に自然にワシを馬鹿にするのが好きなようじゃの」
ジト目でギラリと睨む阿笠に対し、

「んー？ そうかー？ 普通に博士の発明品には助かってるけど」

一転、コナンはあっけらかんと答える。何一つ疑問を持っていないように。

「俺がこうやってちびっこ探偵をやっていけるのだって、博士が開発してくれた発明品のおかげなんだぜ？」コナンは小さく息を吐いた後、「前に志保のヤツに言われたけど、『俺の少年探偵のライフラインは博士』なんだから。もっと自信持てって」

十分感謝している、とコナンは笑う。

それに釣られるように阿笠も頬を緩める。

が。

「ん？」

阿笠は何かに気づいたように、

「感謝はしておるが、凄イとは思っておらんということかの」

ギチギチと笑みが凍り付いていく。

「い、いや……だって博士の発明品ってほとんどがガラクタじゃね

ーかよ。しかも他の誰かが開発した発明品のパク——」

「新一。キミの台詞にはそこはかとなく悪意と上から目線が含まれておるの」

発明品をガラクタ呼ばわりされた、阿笠はムツとしたようにそう答えた。

蒼い鳥 Blue Bird・(12)(後書き)

これで第1話終了です。

第2話は少しコメディちつくから始まります。

感想・評価お待ちしております。

ギブソン Gibson・(1) (前書き)

哀視点です

ギブソン Gibson・(1)

女の子たちの朝は早い。

現在時刻、朝の六時二分。

朝の六時を早いと思うか遅いと思うかに個人差はあれど、男の子から見ると十分早い。

女の子という生き物は他人（主に男子）が思っている以上に見た目を気にする傾向が強い。髪の手入れ。肌の手入れ。爪の手入れ。小じわの手入れ。見えない所ではお腹の手入れなど、朝だけで手入れをする箇所は最低でも五箇所は存在する。

と、言っても。小学一年生の六歳前後の小さな女の子がそんなことを三十路まじかのOLのように鬼気として気にするようでは日本が幼い国と思われても仕方がないと思う。

「どうしてと言われても……困るんですけど」

阿笠邸がいくら豪邸と称されようと、流石にどこかの高級ホテルのスイートルームのように、一つの浴室にいくつもシャワーが設置されているわけではない。一人がシャワーを使えば、必然的に一人は浴槽に浸かることになる。湯船にあへらー、と気持ちよさそうに浸かっているタナの質問に、シャワーの白い湯気と程よい湯水を浴びながら哀はそう告げた。彼女の華奢な体を伝う雫が、胸元にへばり付いた石鹸の泡がお腹の方へと押し下げられていく。

「もしかして……まだ恥ずかしかったりするの？ 新一と話すの」
湯船の中から視線を上げながら、そんなこと言うタナ。彼女としては『どうして新一に自分が心配していたという事実を隠したのか』ということがとても気になっていたのだ。別に彼女が自分の名前を勝手に使ったことを怒っている訳ではない。

「いや……別に恥ずかしいって訳じゃないですけど……」

哀の声がわずかに弱まっていく。嘘は吐いていない。実際、哀は人見知りという訳でもないし、人と話さないのも人見知りというよ

りはただ単純に口数が少ないだけで、人と対面して全身が硬直してしまうような人種ではない。

だが、コナンと話す内容が内容であれば話は違ってくる。

彼がいつも哀に話しかけてくる内容は決まって『事件の推理の手助け』や『哀の心配』ばかりだった。決して自分のことは話さないし、ましてや自分の『弱音』なんて絶対に誰かに見せない。その証拠に彼の涙なんて一度だって見たことがない。

昨日のアレは、

確かに、彼の『弱音』だった。

彼がそれに気づいているのか気づいていないのかは大事な所ではない。ようは、彼が『知らぬうちに感じていた弱音を吐き出した』ことが大切なのである。

そして、その『弱音』を意識的にしろ無意識的にしろ、幼なじみの希麻せつりあんタナではなく『他人』の灰原哀みやのしほを吐き出した。いつも勝気な彼が。いつも自信に満ち溢れた、彼が。

そんな彼に対し、哀は思う。

「……正直なところ、恥ずかしいってことは……ありません。けど、けどなんです。私が答えてよかったのか分からないんです。彼の『弱音』を見ていいのは、その……蘭さんだけじゃないかって……思っんです」

何やら深刻にそう答える哀に対し、タナはとてくだらなさそうに、

「うーん、どう考えても考えすぎだと思うけど」
そう言う。

「哀ちゃんは一のことが心配になったから声をかけた。これって別に不思議なことじゃないと思うよ。友達が友達の心配をしたって誰も不思議がらないし、新一だって嬉しかったかもしれないよ」

友達が友達を心配する。

確かに、何の特筆もない当たり前のことだ。

しかし、哀は心のどこかで自分が、自分の過去あやまちを気にする。それも別に悪いことではない。それもある意味で当たり前なのだから。だけどその前提は。

灰原哀という少女が江戸川コナンという少年の友達だという大前提があつてこそかもしれない。

ぬるま湯に流され、お腹から太股へと流れていく白い泡の感触に彼女はむずむずしながら思う。

（私は……、彼の人生を狂わせた薬品を作る手助けをした……）

結局はそこに話が戻ってしまう。

何度も話し合つて、その度に『関係ない』と一蹴されても、心のどこかでその事実かこが哀の心のどこかに居座っている。

——縛っている。

「……新一がどうして自分の『弱音』を他人に見せないか分かる？」
突然の問いに哀は黙る。

「……………」

タナは優しく微笑むと、

「新一はリーダーなの。新一は昔っからそうだった。生まれつきのリーダーシップでいくつもの輪を作り上げた。今だってそう。少年探偵団の皆。FBIや警察の人たちとも親しくしてる。大人の人にも負けない推理力でいっつも大人の人を助けてる。大人の人は気づいていないかもしれないけど、そういう役割つてリーダーなの。人の上に立って、皆を傷つけようとする敵を倒して、皆を無条件で守る」

それをリーダーだとタナは言う。

哀はコナンの顔を思い浮かべる。

確かに彼をリーダーと呼んでも構わないと思う。彼は一人で大勢の人間を引っ張って、大勢の人間を導いて、決して弱音を見せな

い、とても強いリーダー。

しかし、哀はそこで首を傾げた。

「……けど、それが何の関係が？ 彼は確かに私たちのリーダーだといつてもいいと思います。生まれつきのリーダーシップをフルに使って、輪の中心にいるんですから」

「それだよ」

「それ？」

「新一はいつも輪の中心にいる。だからこそ、新一は絶対に『弱音』を見せない、ううん。見せちゃいけないの。まあ……正確には新一が勝手にそう思ってるだけって話なんだけどね。確かに新一は皆を守るために敵を倒すことが出来る。——けれど、それは同時に敵を作ることにもなる。そんな新一に必要なのは守るべき仲間じゃなくて、新一と対等に、弱い部分も見せられることが出来る存在だと思っんだ」

「……………」

幼なじみは対等にはなれない、とタナは言う。

コナンがそもそも自分の正体を隠そうとしてきたのも、幼なじみのタナを危険な目に遭わせないためだった。結果で言えば、幼なじみのタナはコナンが関わっている事件に巻き込まれてしまった。

それをコナンは酷く後悔したはず。

守ると誓った大切な存在を守ることが出来なかったのだから。

だから、コナンは、“今度こそは”と心に誓ったはずだ。

だけど、それは誰にも伝わっていない。

それはそうだ。

彼は一人で。

“心”に誓ったのだから。

それはコナンの『覚悟』だったのだ。

『覚悟』は口に出すと安くなってしまう。コナンはそれを恐れて、

あえて誰にも相談をしなかった。悪い癖だと言ってしまえば、それまでだが。タナはそれをあえて言及しなかった。

彼女もまた、悩んでいた。

『自分のせいで新一が苦しんでしまった』と。

それは誰のせいでもない責任。

だけど、心優しい彼女はそれを背負ってしまふ。

だから。

タナはコナンと対等にはなれないとタナ自身は言う。

自分は守られるべき存在で。

コナンから見ると、一度守ることに失敗した存在。

その言葉だけが二人の間に立ち塞がる。

「……ほんと、そういう存在って必要だと思うんだ」

湯船の中からタナの濡れた手がにゅつと伸びてきた。その手は何かを求めるように、ぽむつと。哀の頭の上に置かれる。

「もしかしたら、新一。そういう『弱音』は哀ちゃんの方が見せやすいのかもしれない。だから……新一のこと、遠慮せずに心配してあげて、ね」

ぽむぽむ、と。タナは迷子の子供を宥めるように、優しく哀の頭を撫でた。そのタナの手は温かった。

タナはゆっくりと頭を撫でると、しばらくして頭から手を離れた。哀は自分の体に残った白い泡を、上から下へ指を這わせて、しつこい泡を洗い流し、シャワーの蛇口を捻ってお湯を止める。

「……………いいんでしょうか。私なんかが」

「いいに決まってるよ。誰も反対しない」

タナの答えはとても年下とは思えないほど、優しい。

ギブソン Gibson・(2) (前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(2)

コナンはふわふわと眠たい頭を揺らしながら寝室から出てきた。まだ意識の半分以上は眠気の世界に捕らわれているのか、寝ぼけたまま、

「……ふあ。おはよ……はかせ……」

「おはよう。新一くん」

「あれ？ 蘭と志保は……まだ寝てんのか？」

「とつくに起きて二人で一緒にお風呂に入っておるぞ。キミが最後じゃ」

「あ、そ」

ほとんど寝ぼけているコナンは阿笠が何を話しているのか分からない。

阿笠は四人分（＋黒猫）の朝食を作っていた。とは言っても、トーストにスクランブルエッグ、昨日のスーパで売っていたツナサラダ（半額）、コーヒーという超お手軽な朝食セットだ。

コナンは寝ぼけたまま焼きあがったトーストを口で咥えると、ふらふらと歩いて、阿笠邸の自慢でもある五五インチのテレビ（二二万八千円）をつける。

「……特に変わったニュースは……ねーか。ま、そんな毎日毎日変な事件に巻き込まれる訳もねーし、これが普通だよな。どの局も政治とかトレンドとかを紹介してるだけだし、気になる話はねーな」
何も変わったニュースがないと分かったコナンは寝ぼけたままテレビを消す。別にこのままテレビをつけていてもよかったのだが、コナンは居候である身なので無駄に電力を垂れ流す訳にもいかなかった。

「いくらキミの周りに事件が多いからといって毎日毎日チェックせんでもよいじゃろうに」

自意識過剰じゃぞ、と阿笠は作り終わった朝食をテーブルに置く

とコナンに近づいてコーヒーを渡す。

「別に、そんな訳じゃねーけどさ。何か習慣ついちゃって、やめらんねーんだよな。お、サンキュー」

いい視聴者だよ、とコナンは寝ぼけたままコーヒーを受け取る。

「習慣？ それも探偵としての修行か？」

「別に修行って程でもねーよ。ただ、探偵としては世間の情報を誰よりも詳しくないといけない気がしてな。ってか、そんな大変でもねーから別になんてことないけどな」

コナンはテレビのリモコンを近くのテーブルに放り投げると、既に半分以上かじったトーストを皿の上に戻す。

「やっぱり……気になるのか？ 組織の情報が」

「んー？」

コナンは阿笠の言葉を熱々のコーヒーを啜りながら黙って聞く。

「まー気にならないっていえば嘘になるな。組織の情報ってこういうニュースになるとは思えないけど、偶然ってのはあるかもだし」「何度も言うが、無理に組織に関わる必要はないと思うぞ。新一がそこまで頑張る必要はない。ジョディ先生たちFBIやCIAも動いておるんじや。ヤツらが捕まるのも時間の問題じゃろうて。キミが何もしなくてもな」

確かに阿笠の言う通りではある。

コナンが追っている『黒の組織』を追っているのは、何もコナンだけではない。アメリカのトップの実力者たちが集まった『FBI』や『CIA』も同時に『黒の組織』を捕まえるために追っている。それはとても心強いことに違いない。

もちろん、日本の警察だって『黒の組織』の存在に気づきさえすれば、全力を持って『黒の組織』を追うに違いない。

それは、もちろん分かっている。それでも。

心のどこかで、コナンは、

自分の手で『黒の組織』に引導を渡したいと願っているのかもしれない。

自分の体をこんな体にし、一人の少女に背負いきれないほど重く大きな十字架を背負わせ、大切な幼なじみを傷つけた『黒の組織』に対して、コナンはとても大きな敵意を感じているのかもしれない。それは醜いといわれれば、とても、醜い。人の感情において『嫉妬』の次に醜いのはおそらく『敵意』や『殺意』といったような、どす黒い腐りきった血反吐のような感情であろう。

「俺にもこういう感情があつたんだな。いくら誤魔化しても、もしかして“恨んじまって”んのかも」

話題を誤魔化するようにコナンは朝食が置かれたテーブルを見る。

「あれ？　そういうばホームズの餌は。何かあそこでふて腐れているみたいだけど」

コナンは言いながらテーブルの上を指差す。

ふて腐れていると指摘されたホームズは超お手軽朝食セットの前でぺちぺちと前脚で皿を叩いていた。その様子は「ま、まさか……これを食うのか。——ご、ごくり。さ、流石の私も覚悟が必要だな……やっぱムリ!?　湯気出てるもん、見るからに熱々ですよ、お爺さん!？」と語らずとも自身の猫舌アピールを精一杯していた。

「お、おお。すっかり忘れておった」

阿笠は慌てて、キッチンの片隅に置かれている猫缶を取りに行く。

「ん？　博士ー！　電話鳴ってるぜー」

阿笠邸の電話が鳴る。忙しい阿笠に変わって電話を出ようかとも思ったが、

「すまん新一。ワシが電話に出るから、キミはホームズに餌を頼む！」

そういつて阿笠はキッチンから猫缶を放り投げてきた。

「おっと。分かった」

フォークのような弾道で飛んできた猫缶を受け取るとコナンは缶の封を切って開ける。

コナンがホームズに近づくと、ぴくりとホームズの耳が立つ。餌が来たことに反応したかと思うかもしれないが、実は違う。

「何だよ……まだ怒ってんのか？」

コナンが黒猫の一步手前ぐらいまで来ると、可愛らしい仔猫の鳴き声『みにゃー』から、わりと本気の絶叫『しゃーっ！ ふしゃーっ！』に進化している。

ホームズという名前のくせにコナンとは相性が悪いのだ。

その理由が、以前哀に向かって黒猫を放り投げたという動物虐待ギリギリの行動によるものであるため、ホームズとしては『また投げられる！？』と警戒しまくっている。

そんな訳でコナンにホームズの餌やりを任せた阿笠の判断は二二〇パーセント間違っていることになるのだ。

だが、そんなことコナンの頭の中にはないのか、

「さあ……観念してこの猫缶を食べやがれ……」

じりじりと黒猫に近づく。

と、

ホームズが地面を蹴ったと思ったら、コナンの肩に飛び移り、更に高く跳躍。ズシャー、と。コナンとの距離を離れた。

黒猫がいきなり自分めがけて跳んできたことに驚いたコナンは軽く尻餅をつきそうになる。しかし、人間としての尊厳のために何とか堪えることが出来た。

（……くっそー、俺としたことが結構本気で驚いちゃった。たかが猫一匹に驚かされてるようじゃ、名探偵失格だぜ）

そんなコナンを見てホームズは鼻を鳴らした（気がした）。

鼻を得意げに鳴らしたホームズはコナンに背を向けて、スルスルと走り出す。

（こ、これは——宣戦布告というべきか——ッ！）

コナンの口元が引きつる。

結構本気でカチンと来たコナンはホームズの後を追う。

（ち、ちくしょう。何で猫に餌をやるだけなのにこんな追いかけっこをしてるんだ俺は。こっちは寝不足の体を必死に動かして、猫缶を恵んでやるうってのに、何で逃げられなきゃなんないんだ……っ）
すっかりホームズを見失ってしまったコナンはあちこちを見回しながら廊下を走る。

と、どこかで聞きなれた鳴き声が聞こえてきた。

（うん？ この声は確実に——ホームズっ！）

阿笠邸で飼っている猫はホームズだけなので、この猫の鳴き声は必然的にバカ黒猫一択になる。

コナンは立ち止まってその鳴き声が聞こえてくる方向を見極めた。コナンには絶対に聞かせないような甘ったるい鈴のような鳴き声は、少年の耳によく通る。道が狭いからか、鳴き声の方向を探すのは苦勞しなかった。コナンは鳴き声のする方向に視線を向ける。そこは『浴室』だった。

（ふん……バカめ。そこは密室。つまりは——行き止まり……ッ！）

彼は浴室の扉の引き戸に手をかけて、

「お前は完全に包囲されている！ とつと観念して、この猫缶を食いやがれーッ！」

スッパーン！ と勢いよく浴室の扉を開け放つ。

勝った、と。コナンが勝手に勝ち誇って口元を緩めていると、気づいた。

視界の先にシャワーを浴び終わって、濡れた体を拭いている少女がいた。

しかも二人分。

少し整理をしよう。

まずは一人目。赤みがかった茶髪の少女は、濡れたままの体をタオルで拭いていて、当然、服などは着ていない。……どころか、下

着すら身に着けていない。当然だ。体を拭いているのだから。彼女は髪の毛を入念に拭く派なのか、どこかのグラビアポーズのように両手を頭の上に置き、脇がコナンに完全に見えるようにしてタオルで頭を拭いていた。詳しくいうと、そのポーズのまま固定されていて、口の端がぴくぴくと不気味に痙攣している。

そして二人目。黒髪の少女は体を完全に拭き終わったのか下着はなんとか穿いているという状態だった。……しかし、下着の上から白のプリーツスカートを穿く予定だったのか、中腰のまま固まり、中途半端に穿きかけの状態であった。彼女の口元もまた、ぴくぴくと痙攣し、更に言えば彼女のこめかみにうつすらと青筋が浮かんで見えた。

永劫^{えいじゅう}とも思える沈黙の中、コナンはうつすらとだが阿笠が、『とつくに起きて二人で一緒にお風呂に入っておるぞ。キミが最後じゃ』ということを言っていたのを思い出す。

眠気状態がマックスに近かったコナンはホームズを追いかけるのに夢中でそのことをすっかりと忘れていた。

その黒猫はというと二人の少女の足元で浴室独特の湿気と暖かさが心地いいのか、眠そうに前脚で顔をのんきに洗っている。

彼女たちも悲鳴の一つでもあげてくれればいいのだが、どこか諦めているように体にタオルを巻いたり、上着を身につける。その静けさが逆に少女たちの怒りボルテージが振り切っていることを表している気がしてならない。

ゆっくりと流れる時間の中、コナンは喉の奥に残った言葉を搾り出す。

「え……っと。あの……弁明の余地は」

タナはゆっくりとスカートの止め具と上着のボタンを閉めて、

「うん。問答無用だね。新一」

遠く彼方から子供たちの無邪気な声が聞こえた。

「コナンくん、遊びに来たよー!」

「うつす!」

「灰原さん、おはようございます」

「あら、おはよう。今日も元気ね」

「そ、それはもう! 僕たちは元気だけが取り柄みたいなものですから!」

「今日は……えっと。サッカーをする日だったっけ? どの公園に行く?」

「近くの公園でいいんじゃないかねーのか?」

「ねー、コナンくんはー?」

「まった歩美ちゃんはコナンくんばかり」

「???」

「うふふ。それじゃあ……行きましょうか?」

一方その頃、楽しそうに談笑しているリビングから遠く離れた阿笠邸の浴室の脱衣所の物陰には、ボロ雑巾になれ果てた江戸川コナンが転がっていた。

ギブソン Gibson・(2) (後書き)

そりゃあ一つ屋根の下に一緒に暮らしていればこういうイベントも起きるでしょ。

何か、作者はバトルイベントの次にこういうイベントが好きなのかもしれない。筆の進みが異常でした(笑)。

感想・評価お待ちしております。

ギブソン Gibson・(3) (前書き)

キャンティ視点です。

ギブソン Gibson・(3)

東京の街を鴉のような風貌の女が歩いていった。

その名をロゼッタ^{II}シルヴェストリという。しかしその名前よりもキャンティという赤ワインの名前の方が彼女を知っている人間も、彼女自身もしつくりとくる。世界に散らばる『組織』のスナイパーである彼女は笑みを含んだ顔で東京の雑踏を歩く。

真っ黒なライダースーツを駆のゴミ箱に放り込んだ彼女は淡い青色の作業着に身を包んでいた。所々に土や何かに裂かれたような傷がある。だが、その傷こそが鴉のような女を街の中に溶け込ませる要因である。作業服が汚れていても何の不思議もない。最近では外国人労働者も増えてきているので、彼女がスポーツバックほどの大きさの鞆と、長さ一二〇センチほどの大きさの筒を持ち歩いても、それが何かの作業用具と思うだけで、街を歩く人間は首を傾げもしない。街を歩く人間は彼女を避けはするが、それを見て不信感を抱くことは決していない。

「――まずは、第一過程を終了^{クリア}」

彼女は歩きながら口の中で呟く。

鞆の中から一センチほどの大きさの物体を取り出す。形はサイコロのような正方体。色は黒一色。それは指向性マイクと小型カメラを内蔵した、『組織』の人間が開発した、監視目的を主とした小型カメラだ。

「――続いて、第二過程に移行^{シフト}」

まるで歌うように呟いた彼女はそのカメラを指で弾いて、近くの自動販売機の床下に滑り込ませる。地面に衝突したカメラは壊れることもなく、ウン――と。起動音を鳴らす。一センチほどの大きさの小さなカメラの端に赤いランプが灯る。^{プロセス}

「――第二過程の手順は米花町の地図の形成、オよび。餌を捕らえるための撒き餌」

ゴミ箱に、街路樹に、電柱の足元に、路地裏の入り口に、——彼女は進路上に存在する“物陰”という“物陰”に数百と用意したカメラを滑り込ませていく。

数百と用意したカメラの最後を親指に置き、最後に、

「——第二過程、これにて終了。^{クリア}と。待つてな、エジード」ブリュノ。アタイがアんだの望みを叶えてあげる」
ピン、とそれを弾く。

全てのカメラを配置し終えた、彼女はスポーツバックの中からA4サイズの黒いノートのようなものを取り出した。それは実際の紙で出来たノートのように折りたためる液晶モニタ。普通の液晶モニタのように『受信』だけを行うだけではなく、その液晶モニタは先ほど彼女が町中にばら撒いたカメラの内容を『受信』して、更にはそのデータを組織のバンクにアクセス、つまり『送信』することが出来る。

モニタはタッチパネルになっていて、彼女が指で触れるだけで、画面が切り替わっていく。

最初に液晶モニタに移ったのは米花町周辺の地図。その地図上に赤い点が無数に現れる。これは彼女がばら撒いたカメラの位置を表すモノで、更に彼女がその赤い点にタッチすると、今度はそのカメラが映し出す映像に切り替わる。

「……動作異常ナシつと」

つまらなさそうに呟く彼女は実は機械が苦手であるため、これを感じるだけで数週間は期間を要した。

カメラに映っているのは街を歩く無数の人間の姿。それを確認し終えた彼女は画面の端にある『データバンク』ボタンを押す。すると地図が描かれていた画面が一瞬で切り替わり、大勢の顔写真が整列されて配置している画面になる。

その画面に切り替わると今度は『Not検索』というボタンを押した。

「えつと……確か、入力したキーワード以外のモンを探すっていう

機能だったか？……まったく、メンドクセエ。入力するキーワードは……『死亡確認』と『モルモット』っと」

間違わないように彼女は口の中で呟きながら一つ一つの動作を行っていく。モニタは『検索中』という文字が浮かび上がり、次々に写真が消されていく。数百近くあった写真はとうとう二〇名以下にまで絞り込まれる。

それでもまだ足りない判断した彼女は、今度は普通の『キーワード検索』ボタンに触れる。『キーワード検索』は文字通り、入力したキーワードに当てはまる写真を探し出す機能のことだ。

ロゼッタは静かに指でモニタを操作する。

「とりあえず……」アボトキシン「APTX4869」……ツチ、それでもまだ絞れねエか。……だったら、『ベルモット』っと」

最後には写真の映像が三枚だけ残った。

一つ目の写真の下には『裏切り者』シェリーと赤い文字が書かれていて、二つ目の写真の下には『天使』エンジェルと赤い文字が書かれていて、三つ目の写真の下には『銀の弾丸』シルバーulletと赤い文字が書かれていた。

「オーケー。標的はこいつらか……。み、みや……アン？　なんだこりゃア？　何でもこう日本の文字ってのは文字っていうよりも絵っぽイんだ？　こんなの覚えられるワケねーだろうが」

写真の下赤い文字の上に白い文字でその写真に写っている人物の名前が白い文字で書かれているが、ロゼッタは日本語が読めないため、それが何と書いてあるのか分からない。

だが、赤い文字で書かれている通称『コード』には、補足で。

『裏切り者』シェリーの下には『Sherry』と書かれていて、
『天使』エンジェルの下には『Angel』と書かれていて、
『銀の弾丸』シルバーulletの下には『Silver Bullet』と書かれていた。

ロゼッタのように日本語をまったく読めない人でも、『仕事』がこなせるようにと。この液晶モニタを開発した人間が改良を施してある。

女にとって名前などどうでもよかった。ようは標的の名前さえ分かれば、十分に『仕事』をこなすことは出来るのだから。

液晶モニタを鞆の中に仕舞い直すと、女は、

「約束したぜ。エジード」

笑いながら、雑踏の中に消えていく。

ギブソン Gibson・(4)(前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(4)

コナンたち少年探偵団の皆はサッカーをするため近くの公園にまでやってきた。

今日は土曜日。小学生は休日を満喫する日だ。

先週あたりだったか、今度の土曜日は皆で集まってサッカーをしようと思っていた。ただし、そのぐらいの時にコナンは病院で入院していたので、昨日の夜にタナと哀から初めて聞いた話だった。

しかし、基本的にサッカー大好き少年である彼はサッカーをやることに何の反対もなかった。朝から昼間でぶっ続けでボールの蹴り合いをした子供たちは昼の一二時ちょうどにいったん、解散することになった。

ばーいばーい、とぶんぶんと手を振る子供たちに比べてコナンと哀は少し疲れたように手を軽く振り替えた。タナだけが子供たちに全力で応えるように、それこそ小学生のように元気よく手を振り返す。

子供好きだからこそ出来る芸当だろうが、ずっとサッカーをして体を動かしているにもかかわらず、その無尽蔵の元気はやはり空手で鍛えた体力のおかげだろうか。

そんな元気いっぱいタナに比べ、基本的にサッカー少年ではあるが、サッカーと同じくらいに血みどろの推理小説を部屋の中で黙々と読むのが好きなコナンと、運動はおろか、日によっては日の光の下にさえ出てこないこともある科学者哀は、朝からぶっ続けで体を動かして、多少ではあるが疲れていた。

空手一色の『体、鍛えてますから』と笑いながらいえるタナと、『いや……運動はするけど、鍛えてるってほどじゃ……』と俯いたままの二人では、そもそも運動能力に差が出て仕方がないと思う。「ほらほら、どうしたの。二人とも。もっと元気よくしよっ」

別に皮肉でもなんでもない彼女の言葉に何だか疲れている方がお

かしいのではないかと勘違いしてしまいそうになる。

しかし休憩ナシの三時間ぐらいぶっ続けのサッカーは人によっては冗談又キで死ぬると思う。

「と、とりあえずお前が元氣いっぱいなのは分かった。けど……とりあえず水が何か買いにいこうぜ……」

コナンは空を見る。

雲ひとつない快晴。写真付の事典で『快晴』という項目を探してそこに貼り付ける写真として申し分ないくらいの超晴れ。

今朝の天気予報は九月のくせに三〇度を軽く上回っているらしく、外へ遊びに出かける方や出稼ぎに出る方は十分に水分を取って熱中症に注意しましょう、と、テレビのお天気お姉さんが快晴に負けなほどの爽やかな笑顔で言っていたのを思い出した。

コナンの提案に珍しく、哀も手を上げて賛成していた。

声を出すことさえ辛いのか、コナンは突っ込むきすら失せていたので何も言わなかった。

タナはそんな二人の提案に仕方ないなー、と言わんばかりに肩を揺らしながら水分補給の提案に乗る。

そんな訳で阿笠邸に帰ろうとしていた三人は急遽、道を変えてコンビニへと向かう。阿笠邸へと帰る道にコンビニやスーパーのような買い物施設はないので、米花町の都心へと向かうことになった。

ギブソン・Gibson・(5)(前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(5)

コンビニの前。

コナン、タナ、哀の三人は、それぞれ、ミネラルウォーター、お茶、コーヒーをそれぞれコンビニで購入すると人目も気にせずに、それをコンビニの前で飲み干す。

都心はやはり人の数が多い。土曜日という休日もあつてか、町を歩いているのは学生などが多かった。都心は色々遊ぶ場所も多い。ゲームセンター、ボーリング場、カラオケなど、町を数分歩けば、何かしらのレジャー施設があるので、学生だけではなく家族連れの姿もちらほらと見えた。

「ぶはーっ！ 生き返ったーっ」

あと数分でも遅れていたら熱中症になつていかもしれない喉の渴きが一気に潤うのは何度味わつても天にも昇る気分だ。この感覚だけで人は幸せを感じることが出来ると実感した。

五〇〇ミリリットルのミネラルウォーターの中身が一口飲んだだけで三分の一ほど無くなった。それほど喉が渴いていたということだが、

「もう、そんなに一気に飲んだらお腹壊しちゃうよ」

健康志向が高校生時代も小学生時代も変わらない幼なじみに注意されてしまう。

「ったく、子供扱いすんじゃないの。そのぐらいの加減は分かってるよ」

「どうだか。新一ってば自己管理ほとんど出来ないじゃない」
「なんだと」

「いつだったか、推理小説を読みふけて、一日中何も口にしながらつたことあつたじゃない」

「い、いつの話を掘り返してんだっての。それに今は推理小説を読んでる訳じゃねーんだから、いいじゃないかよ」

何だよ何よとコナンとタナは水の飲み方一つで喧嘩を始めた。

コナンとタナの姿が高校生の大人であれば、この光景を見た他人は『痴話喧嘩』にしか見えないだろう。それぐらい自然に二人は喧嘩をしているのだ。

当然、いつもはコーヒーと言えばブラックの哀も流石に疲れているのか微糖コーヒーを飲んでいる哀もその光景を見て、

「（……ごちそうさま）」

と、決して二人には聞こえないように呟いた。

「……それで、これからどうする？」

「……そうね」

喧嘩は五分も立たずに終了した。この短い時間こそが『痴話喧嘩』である証拠でもある。それに気づいていないのか、幼なじみコンビは同時に空を見上げる。

現在時刻一時ぐらいといったところか、東京の街は九月という”秋”であるにもかかわらず、炎天下の灼熱地獄と化している。コンビニの自動ドアが開くたびに中の冷房の風が三人に程よく当たるため、出来るだけここを離れたくない。それが三人の素直な感想だった。

江戸川コナンはうだるような暑さを前に、

「……ここから博士^ちん家^ちって結構遠いんだよね……」

ほとんど死にかけのように呟く。

「……それ、言わないで……」

元気いっぱいタナでさえ都会のコンクリートのジャングルが作り上げたヒートアイランド現象に参っているようである。

哀は額から生み出る珠のような汗を白い刺繍の入った高級そうなハンカチで拭いながら、

「……ここにこのままって訳にもいかないでしょうね」

敬語で話しているということはタナに話しかけたのだろうか。別にタメ口、敬語に文句は無いが、その差は一体何だと、コナンは純粹に思う。

「うーん、せめてもう少し涼しい所に行きたいよねー」

もう少し涼しい場所というところかの建物の中とかだろうか。コナンは思いながらすぐ後ろに見えるコンビニの中を覗く。

「……………あー、」

コンビニの中を軽く覗いたコナンはすぐに体を前に向きなおした。コンビニは基本的に『冷房の効いた室内でのんびりする』という条件からは遠く離れているはずなのだが、他の喫茶店やファーストフード店が満員だったのか、中は『便利なモノが二四時間体制で手に入る便利なお店』というコンビニとは思えないほど、超満員だった。

どう考えても営業妨害だが、店員も外の暑さを理解しているのか、立ち読みや商品を眺めるといふ迷惑行為を黙認しているという状況だ。

「そうだな……このままって訳にもいかねーし、そろそろ飯も食いてーよな」

自分のお腹をさすって、何となく『お腹減ってます』アピールを試みる。

全身を使ったスポーツを三時間以上ぶっ続けでやって、現在時刻が一時頃。お腹が減るには十分、——十二分な理由だ。

それは女の子二人も同様なのか、暑さに唸りながらも、うーんと考え込む。

すると、

「あ」

何かいい方法でも思いついたのかタナがぼんつと右手で拳を作り、左手でそれを受け止めるようなポーズをして、

「いい場所があるよ」

これはいい考えだんっふっふっふー、と今にでも勝ち誇りそうな顔をしていたのでコナンが先に、

「あ、デパートとかはナシな。どうせのこと同じような惨状だろうし」

先手をうつておく。

確かにデパートなど大型のショップに行けば涼めるとは思うが、後ろに見える惨状と同等、もしくはそれ以上の地獄が待っているかもしれない。

タナはコナンの言葉に「ちつつち」と人差し指を立てて、自分の顔の前で左右に振る。

「知ってる？ 米花町に新しく出来た場所」

「場所？」

首を傾げる哀に対して、タナは、

「覚えてる哀ちゃん。昨日、歩美ちゃんたちが話してた、新しく出来たカクテルバーの話」

「あ、ああ……そういえばそんなこと話してたような気が……」

哀は昨日の帰り道に話していた内容を思い出すように自分の顎に指を置く。

「おいおい、まさかそこに行こうってんじゃないだろうな」

「そだよ」

何の迷いもなく頷くタナに対して、

「それは……何か。ツッコミ待ちか」

「???」

コナンの言葉にタナは思いっきり不思議そうな顔をする。
と。

何かに気づいたのかタナが顔と一緒に両手も思いっきり横に振る。

「あ、違う違う！ 新一、何か勘違いしてる。私が言ってるのは、

そのカクテルバーがある地下街に行こうって話っ」

「地下街？」

いまいち思いつかない単語にコナンと哀は同時に首を傾げた。

「ふふん。それでも一応探偵の娘ですからね。新一たちが知らないことを知ってたりするんだよ」

タナは妙に嬉しそうに、

「百聞は一見にしかずってね。とりあえず……行ってみよ。少なくともここにはずっといるよりはマシだと思っから」

そう言っ、ゴミ箱に空になったお茶のペットボトルを放り込んだ。

ギブソン Gibson・(6) (前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(6)

「おー、すげえ。小説の中みたいだ」

「米花町にこんな場所があっただなんて」

二人は素直な感想を口にする。

タナに連れられて案内された場所は確かに地下街と呼ぶにふさわしい場所だった。

初め、コナンと哀が想像していたのは地下デパートのような小さな飲食店や惣菜売り場が並んでいるような場所だった。しかし、ここは明らかに地下デパートの域を超えた、地下街だった。駅前というほどでもないが、地下街の中はそれなりの人が行き来していた。

どうやら米花町のあらゆるデパートや駅と繋がり、それが迷路のように広がっているらしい。

なので飲食店はもちろんのこと。地下という場所を生^{いか}して、騒音対策をとったゲームセンターなどの娯楽施設が何件も存在した。

タナが説明するには、東京は元々土地不足に悩まされていて、更には日本が地震大国であることも考慮して、このような地下に街を作り上げる計画は何年も前からあったそうだ。その二つの問題点を一気に解決出来る策というのが、この米花町の地下に存在する、この大きな地下街ということらしい。

東京でやけに地震が多いと思っていたのはいつの間にか地下を掘っていた工事音のことだ。もちろん、普通の地震もその間に起きたりしたので、この地下街が出来るのに時間がかかったのは言うまでも無い。

どうしてそのことをタナが知っていたのかというと。コナンはちらりと地下街の壁に目をやる。

そこには、

『SUZUKI』という文字が刻まれていた。

「つまり？ この地下街を作る計画に関わっていたのは、蘭の無二の親友であり、日本の四割近くの資産を所持していると噂される超大金持ちの鈴木園子すずきのおうしの家の鈴木財閥が関わってたって訳ね」

分かってしまえばどうしてタナがこの場所を知っていたのかもどうということでもなかった。

「うん。前に園子がそんなことを話してたのを思い出したの。まさか……出来てとは思わなかったけどね」

それは結構危険な賭けだったのではないかと思う。

前に園子がそんなことを話していたのを思い出した、とタナは言うが。それはおそらくタナが元の姿である毛利蘭の時であろう。希麻タナになった今では園子とはほとんど会っていないし、会う機会もないのだから。だからその曖昧な情報だけが、この地下街のタナが知る唯一の情報だったのだ。もし、間違っていたら、とんでもない無駄足になっていた。

（確認のしようがねーのは、分かるけど。もっと確かな情報でここに来よーぜ）

コナンは心の中だけで文句を言うことにしておく。

何せ、

「ま、しかし。ここは涼しいよなー」

これに尽きる。

地上の地獄と比べるとここは天国のように涼しい。

地下だからこそ、地上の気温に比べて二度から三度近くは温度が低い上に、地下は冷房が程よく効いていて、ここ以上の心地いい場所
は地上には存在しないだろう。

ここを作った鈴木財閥には心から感謝することにする。

「んじゃ、とりあえず飯でも食いにいくかー。蘭と志保は何か食いたいモンとかあんのかー？ あ、一応言っておくけど。俺たちのお財布事情は小学生ってことを忘れるなよ」

「言われなくても分かってるよ。博士からは余分にお金をもらって

るけど、そんなには使えないよね」

「そうですね」

阿笠邸のお小遣いは小学生にしては多い五千円なので、それなりの飯を食べることは出来る。

が。

やはり、コナンたちは所詮居候なので、そんなにお金を使う訳にはいかない。

「適度に安くて店もそれなりに空^すいているところが理想だな」

言われて、タナと哀は店を探し始める。

と。

「ん？」

コナンが適当に視線を動かしていると、

「もしかして……あれ、か？　蘭が言ってたカクテルバーって」

「え？」

言ってタナはコナンが指を指していた店に視線を向けた。

「あ、うん。多分ここじゃないかな。ほら、『カクテルバー・米花』って書いてあるし」

店は黒の壁を基調とした、少し洒落た感じの大人のバーといったような店だった。中の様子を覗こうと扉の窓の隙間から試みたが、どうやらまだ店を開いていないのか、中の明かりも真っ暗で、外から中の様子を見ることは出来なかった。

「そういえばお前ら何か話してたな。何か、この店の店長が美人でかつこいいとか」

唯一覚えていた記憶をコナンが掘り返すが、

「ほほう」

タナが何故か不機嫌そうに、瞳を細める。

コナンはその声が聞こえなかったのか中の様子を窺いつつ、

「ちよつと見てみたかったかもなー、あいつらがそんなに誉める美人店長」

「歩美ちゃんは誉めてたよ……、すごく美人でかつこいいって」

「そっか……ちつと残念だな。仕込みとかしてねーのかな」

どうにかして顔を見てみたいと試行錯誤するコナンに対し、タナはやや冷たい目で、

「……まったく、新一の年上好きにも困ったもんだね」

「あん？ 何だよ、いきなり」

「年上で美人って聞いた途端それなんだから。新一が美人って誉めた人っていつも年上の人だね？ 近くに可愛い子がいっぱいいるのに、その反応って失礼じゃないの」

「おいおい、まさか自分が可愛いとか思っちゃう口ですか？」

「私じゃない。そんなことにも気づかないから新一はモテないんだよ」

「あー、歩美ちゃんか？ 俺があの子に手を出してみろ。いくらこの姿でも社会不適合者の称号をもらえなくゲットしまうつーの！
ロリコンやん

ってか、いきなりお前は何怒ってんだって！」

「だからダメって言うてるの、私はっ！！」

タナが叫ぶと哀が喧嘩を宥めようと店に近づく。

と、

『まーまー』といいかけた哀の足が止まる。まるで足の中に金でも詰められたように、そこから一步も足が動かなくなる。

コナンとタナがぎゃあぎゃあ騒ぐのに対し、哀は奇妙な感覚に襲われた。

「だっいたい、新一は女の子の気持ちがまるで分かってない！ 女の子の近くで他の女の人の話をするってどうなのよ！」

「話したっていつてもちよつと気になるってレベルの話だろ。そんな怒鳴らなくてもいいじゃねえか」

しかし、そのことに喧嘩をしているコナンとタナは気づかない。

「ね、……ねえ……」

唯一聞こえたのは哀の風の音に出さえ掻き消されそうな小さな声だった。哀の声に喧嘩をしていたコナンとタナがピタリと動きを止めて哀を見る。

「喧嘩もいいけど……そろそろご飯にしない？」
そういつて哀はピッと一軒のお店に指を指す。
そこは小さなラーメン屋だった。

ギブソン Gibson・(7) (前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(7)

ラーメン屋の中は古風なラーメン屋というよりは、ごく普通のファミレスのような造りだった。コナンたちは四人がけのテーブルに、コナンとタナ。そして哀が向かい合うように座った。

ラーメン屋なのにどうしてこんなファミレスみたいな内装をしているのかを店員に聞いてみたところ、古臭いラーメン屋の中に一人で女性客は入りにくいことを考慮して、どうせならば入りやすく、話題にもなるようにとこんなファミレスのような内装にしたのとのだ。

初め小学生だけのお客は中に入ることが出来ないと思ったが、やはりそこは飲食店のようである。とりあえずお金さえ出してくればどんな客も基本的にはウェルカム体制であるらしい。不思議に思っていたらこのラーメン屋の系列が鈴木財閥の会社であることが分かった。

「金持ちつてのは寛容になるのかね。俺たちみたいな子供だけの中に入れてくれるだなんて」

「そんなこと言っちゃダメでしょ、新一。それより何を頼むか決めちゃおうよ」

「へいへい」

子供をあしらうように言ったタナの言葉に若干の不平を感じつつ、コナンは顔が隠れるほど大きなメニュー表に挑む。そもそもどうしてラーメン屋にメニュー表があるのかも店員に聞いてみると、やはりファミレスを意識してのことだそうだ。

メニュー表、とは言うものの。

ラーメン屋である誇りは忘れてはいないのか、メインメニューは醤油ラーメンのみのシンプルな内容だった。メニュー表のほとんどを占めているのは餃子や炒飯といったような、サイドメニューのようである。

「悩む必要もない……か」
といった訳で三人はほとんど即決でメニューを頼んだ。

しばらく待つと三人分の料理が運ばれてきた。

内容は醤油ラーメン。具材は二枚のメンマとチャーシュー、ナルト、海苔という昔ながらの中華そばといった感じのラーメンであった。お腹を満たすにはコレで十分だったし、昔ながらの中華店風のウェイトレスさんによると、基本的にこの店はラーメン屋であるため、ラーメンで勝負しているらしく、サイドメニューはこの店をフアミレスっぽく見せるためのおまけみたいなものだそうだ。もちろん味にはこだわっているので美味しいことは美味しいそうだが、材料にこだわったり、大量生産をしているのでラーメンよりも少し高くなるらしい。

「さつて、早速食っちまおうぜ」

いただきまーす、と給食風景のように手を合わせるコナンとタナに対し、哀は静かに食べ始める。

「？ さっきからどうしたんだ、志保。何か元気ないみたいだけど。もしかしてラーメン嫌いだったか」

哀は阿笠のカロリーを気にしてまったく肉系の食材を食べさせないほど、カロリーに厳しい。もしかしてラーメンもカロリーが高いという理由で嫌っているのかもしれない。

が、そんなことはないのか、哀は小さく首を横に振って、

「別にそんなんじゃないけど」

元気なく麺をすすする。

「ふうん。暑さにやられて元気がなくなっちゃったってところか。辛いならしばらくこの地下街にいるか？」

「そうだね。ここ、涼しいから上にいるよりはいいと思うよ」

「えっ……あ、……はい……」

二人の提案に何故か哀はあまり乗り気ではないようだった。力弱く頷くと、小さな口でラーメンを食べ始める。

「……………」

コナンはそんな哀を見て、

なんとなく、本当に何となく。つまらないと思った。

ギブソン Gibson・(7)(後書き)

総合PVが2万を超えました。読んでくださった方々に感謝です。

感想・評価お待ちしております。

行間 二（前書き）

佐藤視点です。

行間 二

「……うーん、おつかしいな」

がらんとした昼過ぎの警視庁の休憩室で佐藤美和子は携帯電話を見ながら首を捻っていた。

佐藤は誰もいないことをいいことに休憩室の中で口を大きく開けて欠伸をする。

佐藤の黒目はわずかに赤く腫れ、その目じりには涙が浮かぶ。

原因は寝不足だ。昨日の一件で、上司である目暮十三警部めぐれしゅうさぶにこつてりと絞られた佐藤は始末書にプラスして残業をやらされてしまった。

（まあ……傷害事件の犯人を取り逃がし、無闇に警察手帳を晒して更に。拳銃を所持した最重要危険人物を逃がしたってんだから、当たり前前つちゃ当たり前なだけど。それにしても……眠い）

佐藤の手には携帯電話がある。

友人からいい加減『機種変更しろ。古すぎて、女が持つには無骨過ぎる』といわれて、渋々機種変更したばかりで、未だに細かい操作は覚え切れていない。

しかし唯一覚えた操作が、電話とメールとテレビ機能。

佐藤は携帯電話を睨みながら、何度も首を捻っていた。

「佐藤さん、コーヒー持って来ましたよー」

休憩室のベンチに座っていた佐藤が顔を上げると、奥から紙コップを二つ持って、同じく目が赤く腫れている高木が現れる。紙コップからは蒸気が上がり、見ただけで体が暖まりそうである。

佐藤は左手に携帯電話を持ち帰ると高木から紙コップを受け取る。「サンキュー、高木くんも休んだら？」

眠気覚ましにコーヒーには砂糖もミルクもガムシロップも何も入っていない。純粋な苦味が眠気を吹き飛ばす。

「いえ。俺は大丈夫です」

「そ」

高木の返事もろくに聞かず、佐藤は再び携帯電話に目を通す。高木の言葉を蔑ろにしているというよりは、声が耳に届いていないような印象だ。

高木は邪魔をするべきではないと思ったが、どうにも気になる様子で、

「あ、あの……佐藤さん？」

「んー？」

「な、何してるんですか……？」

「んー？」

「メールチェックとかですか？」

「んー？」

返事はない。

「（き、聞こえてない……。俺の声が聞こえないほどメールチェックに夢中ということか……。ま、まさか！ 男！ 男からのメールか！ い、いやいやいや、ま、まさかそんなはず。佐藤さんとはキスをした訳だし……。そ、それなりの関係のはずだ。——ハッ！ まさか佐藤さんにとってキスなんか日常茶飯事の出来事だったんじゃない？ そ、そりやそうだよな俺と佐藤さんが釣り合うはずもないしそもそも佐藤さんはお礼みたいなものでキスしてくれた……。してくれたかそうだよなあれは同情に近いキスだったのかもしれないなだったらやつぱり脈はないってことかーああ何か希望が全部吹き飛んだ気分……。）」

がーん、と頭の中の鐘が鳴っているように高木は自分の言葉に自分が思っていた以上にへこむ。どうしたらいいかも分からずにえっへっへっへーと負のオーラを全身で纏い、全力で頭を抱え込む。

「やつぱないっか」

「……男からのメールがつすか」

「は？」

全身を反るように背伸びをする佐藤に対して、高木は暗い目のま

まコーヒーを飲み込む。

「高木くんが何言ってるか分かんないけど。私が言ってるのはニュースの方よ」

「ニュース？」

思いつきり卑屈モードに入っていた高木もその言葉に何かが引がかかった。高木は自分の携帯電話を開くと、テレビ機能を使ってニュース番組に目を通した。

「何か変ですか？ 別におかしなところは。いつもどおり韓流特集とか他の小さな事件とかを紹介してるだけじゃないっすか」

別におかしいところはない。

いつも通りだ。スポーツ、政治、事件、事故。あらゆるニュースが番組の中で紹介されているだけだ。大体のニュースを伝えた後は今人気の韓国特集や主婦のための料理コーナーなどをやっている。いつもと変わらない東京のニュース番組の風景。

別におかしいところはない。

だが、

「うーん」

佐藤だけが首を捻る。

何が納得出来ないのであらう。

そう高木が軽く首を捻っていると、

「時に。高木くんに質問。どうして私と高木くんは目暮警部にこつてりと絞られたのでしょうか」

佐藤の言葉に高木がピクリと反応する。

「お、思い出したくもないけど……、それはあれですよ？ 俺が傷害事件の犯人を取り逃がした一件と昨日の夕方ぐらいに遭遇した拳銃を所持した危険人物を取り逃がしたせいですよ。おかげで寝不足になっちまってる訳すけど」

「正解」

ちなみに高木は佐藤が警察手帳を出して、処罰が重くなったことは知らない。それに加えて自分のせいで佐藤が危険人物を逃がした

ことも知らない。肩を撃たれた後のことはほとんど覚えていない。佐藤もそのことを高木には話していない。勝手に責任を感じられても困るし、何となく借りを作るもの嫌だった。

「それがどうかしたんですか？」

「まだ、分かんないか。まだまだ青いのか、それとも私だけが気になっっているだけなのかな」

「???」

訳の分からない言葉に首を傾げる高木。それを見て、佐藤は一つの話を持ち出す。

「聞いてるわよね。これからの私たちの仕事」

「あー、はい。えっと……確か、米花町に新しく出来た地下街の近くに昨日の危険人物とよく似た人間が近くの店の防犯カメラに写ってたとかで、そこに行くんですよ」

「そうそう。拳銃を所持した危険人物を放置するほど日本の警察は甘くない。だから私たちはそこに駆り出されたって訳。まあ……やることは多分、地下街周辺の警護と民間人の避難指示ってところかしら？」

佐藤は言い終えてコーヒを一気に飲み干した。空になった紙コップを握りつぶして、高木の答えを待つ前に、

「つまり。この人物は警視庁の人間が動いても何の不思議もないくらい危ないと判断された訳よ」佐藤はパチリと片目を閉じて、「じやなきや。わざわざ警視庁が動く訳もないでしょ」

「確かに警察はそう簡単に動かないモノですけど」

「正確には。動かないじゃなくて。動けないだけだね。ま、そんな訳で、そろそろ行こっか。お仕事」

言っと佐藤は握り潰した紙コップを休憩室内のゴミ箱の中に放り込む。

高木は不思議そうな顔をしていたが、慌てて、

「あ、ちよっと佐藤さん！ 話。話まだ途中ですよ！ 何がおかしいんですか、ニュース番組のどこが！」

言葉に佐藤は振り返らずに一度、頭を指で搔いて、それからゆつくりと振り返って、

「気のせいとか。勘違いとか。色々……うーん、色々あればいいんだけどね。私が気になったのは。どうしてどこの局も拳銃を所持した危険人物を取り上げていないのかっただけ。警視庁が警戒している人間をどうして、放置している、この一点だけよ」

行間 二（後書き）

最近あまり書く気力がなくなってきたので、少し更新が遅れるかもしれません。

感想・評価お待ちしております。

ギブソン・Gibson・(8)(前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(8)

食事を終えると三人はラーメン屋から出た。

味はそんなに悪いという訳でもなかった。しかし、一人納得していないタナがぶつぶつと、

「……なんか、ラーメンっていうよりは中華そばって感じの味だったね。ああいう店って若い人あんまり好きじゃないんじゃないのかな」

「まー、まだ出来たばかりだし？ 徐々にニーズに合わせていくんじゃないの。あのファミレスもどきのラーメン屋も」

料理が大好きな女の子はあの素朴な味が気に入らないらしく、店の経営方針に疑問を持ち、

「ラーメン屋なのにサイドメニューに力を入れるってのも変な話だよ。やっぱりラーメン屋はラーメンで勝負しないと」

「だからラーメンは一つしかなかったろ。しっかり勝負している証じゃねーか」

タナは首を捻りながら、顎にたおやかな人指し指を置いて、空を見上げるように顔を上げる。

「……それにしても、サイドメニューがやたらと多かった気がする」

「……まー、確かに」

これ以上料理大好き女の子を刺激してはいけないとコナンは半ば投げやりな感じで答えた。

コナンはふと自分の腕時計に目をやる。

現在時刻は二時少し前といったぐらいで、地上は炎天下の灼熱地獄に晒されているだろう。地下街は空調のおかげで程よい温度で保たれているので、心地よい状態だが、この天国から地上に上がるには少しばかり勇気がある。そう一度でも思ってしまうと陽の光がわずかでも和らぐまでは外に出たくないと思ってしまってもバチは当たらないと思う。

希麻タナが考え込んでいる中、江戸川コナンが二人の少女を窺いながら、

「で？ どーする、これから。この地下街に留まるなら留まるでいいんだけどさ、ここって何があんの？」

「ここにある施設ってほとんどが騒音対策のためのゲームセンターとかボーリング場とかばかりだけど……そこになっちゃうのかな」
地下の理を生かした遊戯施設となるとゲームセンターなどの日常生活に支障をきたすほどの騒音を垂れ流す施設がほとんどだが、

「うーん……」

コナンは自分の体を見る。その後、タナ、そして哀の小さな体を続けて見る。

「やっぱ……無理っばいよな……」

ゲームセンターなどの施設のほとんどが風俗営業扱いになっているため、子供だけの立ち入りを禁止している店も少なくない。現に通りかかったゲームセンターの入り口に張られている張り紙には『小学生・中学生だけの立ち入りを禁止』と大きな太い文字で書かれていた。

そこまで自己主張しなくてもいいじゃないかと思うかもしれないが、店側としても騒ぎや面倒事が起きるのを防ぐための処置なので、仕方ないといえば仕方ない。

「とりあえず……歩く？」

タナの小学生っぽい提案に、

「ま、それしかねーか」

コナンは頷いた。

幸か不幸か、コナンたち三人はこの地下街に初めて足を踏み入れている。なので地下街の通路を歩いているだけで気分転換と暇つぶしは十分に可能である。

が、不満という訳でもないが。

どうにも子供の姿の不便さを改めて痛感するハメになってしまい、何となく地下街の新鮮味が窮屈に感じてしまう。

「にしても……地下街っていう割には広いよなーここ。どんぐらいあんだろ？」

「園子が前に話してたのは東京全体に道を広げるのが鈴木財閥の目標なんだって」

「ってことは、地下街一つで街でも作ろうとしてたのかなー、あいつの家」

そんなことを話しながら歩いていると、タナが、

「あ」

何かを思い出したように手を叩く。

「ん？　どうかしたか、蘭」

「そういえばここに夕方ぐらいになるまではいるんだよね」

「ああ。とりあえず外が出歩けるぐらい涼しくなるまではいようとは思ってるけど。志保のヤツが辛そうだからってお前も考えてたろ」

その哀は先ほどから一言も口を開こうとしない。どこか他人行儀な顔のままコナンとタナの後ろを付いてきている状態である。

「うん。だからね、一応博士にこのこと電話しないでいいのかわかって。お昼過ぎなのにまだ私たち帰ってない訳だし」

「あー、そういえばそうだな」

言いながらコナンは自分の携帯電話を見る。

「けど……ここ地下だから圏外になってるぜ？　電話するのはいいけど、電話のためだけに外に行くってのはちょっと……」

嫌だ、と続けようとしていたコナンの視線、数メートル先の通路の先に公衆電話が置かれているのが見えた。

どうやら地下でも電話が出来るように設置されているようだ。

地下街にそういう便利なものを設置するならば、どうせならば携帯電話用のアンテナでも設置して欲しいものだが、そういうアンテナでは少し離れるだけで携帯電話が使えなくなってしまうので、携帯電話用のアンテナではなく、公衆電話を設置したというところだろうか。

「あそこに公衆電話があるからあそこから博士^ちん家に電話すっか」

そう言つて数メートル先の公衆電話に指を指す。俺が電話してくとコナンが言うより先に、哀が。

「……私が、電話してくるから……二人はここで待つてて」

「あん？ そ、そうか？」

「ええ。博士に渡されたテレフォンカードも持つてるから」

そういつて哀は自分の財布からどこかの花畑の写真がプリントされたテレフォンカードを取り出す。阿笠から渡されたというところを見ても、そのテレフォンカードのデザインは少し古めかしい印象がある。

「じゃあ頼むわ」

哀が走り去つていくのを見送りながらコナンは、

「何だ……あいつ……」

ほとんど無意識的にそう呟いた。

「そんなこと言わない」

幼なじみに怒られたが、どこか釈然としない。

ギブソン Gibson・(9) (前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(9)

「なあ……蘭。さつきからあいつの様子変だよな」

哀が公衆電話で電話をしているのを見ながら隣にいるタナに向かって話しかける。タナは視線を一度コナンに向けて、その後すぐに公衆電話の近くにいた哀に向けて、

「……………うん」

「やつぱ……蘭も気付いているって訳か」

「……………まあ、ね」タナは一度顔を俯かせてから、「今朝。色々話したからね」

「色々って？」

「色々は色々。この話は男の子には話せないの。それとも何？ 新一は女の子がお風呂の中で話したガールズトークの内容が気になりますか？ 女の子が裸で話していた話の内容が気になっちゃう変態さんですか？」

コキコキと鳴らす指の骨の音が怖すぎて、コナンはぶんぶんと首を横に振った。昨日の『遠慮すんな』発言からどうにも幼なじみの頭の中から『遠慮』という項目が綺麗さっぱり無くなっている気がする。

「まー、正直な話。哀ちゃんもね。悩んでるんだと思うよ。新一と一緒にで」

「俺は別に悩んでなんかいねーよ」

「そっか」

タナは適当に頷いた。コナンは別に強がりで言っている訳でもないの、ここで変に話をこじらせるよりは適当に流したほうが互いのためになる。それが幼なじみ独特の間の取り方かもしれない。

幼なじみ独特の間の取り方^まを取るのはいいのだが、そこで急に会話が途切れてしまった。

あまりにも二人の間で気を遣いすぎて会話のテンポが止まる。

「あー、……………」

何かつい最近にでもこれに近い状況を味わったことがある気がする。今回の場合は奇妙な恥ずかしさはないので、どこか気恥ずかしさよりも気まずさが強い。

「まあ、しっかし。園子の家ってやつばすげー金持ちだったんだな。こんな地下街を丸々作っちゃうなんて、並みの金持ちには出来ねーよな。地下街に配置してあるほとんどの施設が鈴木財閥の系列だつて話みてーだし」

「確か……さっきのラーメン屋もそうだったよね」

コナンはタナの言葉に地下街を見渡す。

「もう日本って国を動かしてんのはあいつの家なんじゃねーのかっと思っちゃうよな。何であんな金持ちが俺たちとおんなじ高校に通ってたんだか」

親友をバカにされたタナは若干ムツとしながら、一步、近づいて、「園子のことバカにしてる？」ずいっと顔をコナンに近づけて、「いくら新一だからって許さないよ」

「ど、どこがバカにしてるって話になんだよ。俺はただ、あいつの家があんな桁外れの金持ちだってのに、俺たちと付き合いするときにはそんなに態度変えないってのがすげーなーって話って——う、おっ！？」

全ての集中力を目の前のタナに持っていていかれたコナンは背後に何かの感触を感じた。

その感触がガツン、とか。そういう系統の感触であれば、それがどこかの壁に激突したと思うことが出来たのかもしれないが、

何故か、背中当たった感触は、——ぼよん、だった。

「きゃっ、ご、ごめんなさい。大丈夫ばうや？」

告げたのは、見た目二〇代前半ぐらい、見ようによっては大学生に見える女性だった。無地の白地のワイシャツ。上から一番目と二

番目のボタンは女性のふくよかな体形のせいで、留められていない。細い足はデニムジーンズが穿かれていて、本当にどこかの大学生のような印象があった。しかしその顔は学生にしては妖艶で、長く伸びた赤い髪は白い紐でポニーテールにして括られていた。その髪の前からは妙にいい匂いがして、コナンたちの周りにはいないような女性だった。

コナンとぶつかった女性は友好的な笑顔を浮かべると、

「いや、ほんとごめんね、ぼうや。お姉さんちよつと急いでてさー。あ、ちよつと悪いんだけどさー、『カクテルバー・米花』って店知らない？ 確かこのあたりにあるって聞いてきたんだけど」

「は、はあ。……えつと。それなら……確かあっちの方に」

コナンは歩いてきた道筋を思い出すように、自分たちが歩いてきた方向に指を指す。

「え！ なになにッ！ 知ってんのぼうや！？」

この地下街で長い間道に迷っていたのか、コナンがその店を知っていることを知ると女性は嬉々として、視線をコナンに合わせるようにしやがみこんだ。

「ま、まあ。たまたま通りかかっただけですけど」

女性のあまりの勢いに気押しされそうになるが、コナンは指で道を誘導するようにその店があった場所を説明する。

と、

不意に女性の体がぐいぐいとコナンに接近してきた。

「ぎゃー！？ 完全に逆だった訳かーっ！ ったく、何なのよこの地下迷路。こんな複雑な道なら案内図ぐらい用意してろっつーの！」

相当テンパっていたのか女性は頭を抱えながら絶叫した。どうでもいいのだが、女性が頭を抱えた時にコナンのほっぺたに女性独特のふくらみが無防備に何度も衝突する。女性の柔らかい髪の毛の先から、ほのかに甘い匂いがコナンの鼻をくすぐる。

（む、胸が……っ）

コナンが慌てて顔を逸らすと、

「……はっはー……もう。新一ったら……ほんと、しょうがないんだから」

「……しょ、しょうがないって……何が？」

聞き返すとタナの笑みがガチガチと固まっていくのを感じた。タナは片手を頬に当てて、小さくため息を吐く。

「子供っていう立場をそこまで利用出来る新一の演技力だけは見習わなくちゃねー。子供だったら許される行為を新一は何の躊躇いもなく実践するなんて……うふふ。新一は本当にしょうがないなーうふうふうふふふ」

顔は偉人の肖像画のように穏やかなのに、瞳の奥の光がきらきらと薄く研いだ剃刀のように光っている。

やばい。

コナンは動物的直感で今すぐここから逃げ出したいと願う。

コナンの隣にいた女性が、コナンとタナの急激な変化に気づいていないのか友好的な笑顔を浮かべたまま、

「じゃあ、ありがとね。ぼうやにおじょうさん。私、そろそろ行かないとやばいんだー」

ひらひらと手を振って、ここから立ち去ろうとする。

コナンとしては『ここに一人にしないでー！』と叫びたかったのだが、『うふうふうふうふふ、もう新一ったらー』と穏やかな顔で笑っているタナを見て、とてもそんなことを叫ぶ気にはならなかった。

女性は説明された道に向かって、歩き出して。何歩ぐらいか歩いた後に、くるりとこちらに振り返る。

「あ、そうだ」

「???」

コナンが何事だと首を捻っていると、

「キミたちがあと一〇年大きくなったら店に来なさい。私、そこで

店長やることになった玖莉くりす栖すつていうの。よろしくね！」

相変わらず友好的な笑みを浮かべたまま、手を振った。

ギブソン Gibson・(10)(前書き)

哀視点です。

ギブソン Gibson・(10)

一方その頃、灰原哀は地下街から遠く離れた阿笠邸に連絡を取っていた。

「だから……帰りは遅くなるわ。でも心配しないで。危ないことに工藤ちゃんと蘭さんは巻き込ませたりしないから」

阿笠に伝えたのは米花町に新しく出来た地下街にということ、帰りが遅くなることだけ。

哀の心のどこかで引っかかっている“ナニカ”については伝えなかった。変に心配をさせるのも嫌だったし、哀の中で『確信』がない。

(……私は……『確信』がないと勘違いしているのか……、……それとも……誤魔化しているのか……)

『カクテルバー・米花』を横切った時、哀は何かの寒気を感じた。それはすぐに収まったから、言葉にする必要もないと思った。けれど、その寒気は確かに哀が知っている感情の一つだった。その感情とは、――黒の気配。

寒気が腕に走ると、哀は迷わずに腕を取った。寒気で腕が凍りつくかと思った。腕を取った腕が寒気で凍傷するかもしれないと思った。それが勘違いであって欲しいと願った。

『そこに哀くんが含まれない所がキミらしいのう。ワシが心配するのは哀くん、蘭くん、新一くんを含めた全員なんじゃからな。そこを忘れてはいかんぞい』

阿笠の声は優しい声だった。その言葉からは親心にも似た、とても暖かい感情が電話越しにも伝わるほどだ。

(……ごめんね……、博士……)

電話を無言で受話器に置くと、電子音と共に公衆電話に挿入したテレフォンカードが排出される。

阿笠との電話を終えた哀が二人の下へと戻ってくると何故か二人

が喧嘩をしていた。

「だいたい新一は年上の人に弱すぎなの！　ちよつと喋ったくらいで鼻の下でれーっと伸ばしちゃってさっ！」

「だ、誰がデレっとしてんだっつーの！」

「そんなの新一の目を見ればすぐに分かるよ。自分は人畜無害の無邪気な子供ですーってアピールをされていて、実は中身が男子高校生の下心に満ち満ちたその目を見れば、ね！」

「人のこと何だと思っただテメエ！」
しかもどこか楽しげに。

(……は、……はは……)

ベキツと。手に握ったテレフォンカードが折れる音が聞こえた。握られてピシッとヒビが入ったテレフォンカードは二度と使い物にならないだろう。

目に見えない恐怖に怯えていたからこそ、哀の中の怒りボルテージが振り切れる速度が半端じゃなかった。

彼女にしては本当に珍しく肺の奥まで酸素を吸い込むと、ありったけの力を込めて、絶叫する。

「話は分らないけど、大体工藤くんが悪い！　そんな気がするっ……！」

灰原哀の珍しい絶叫に二人が慌てて振り向いた。

電話が終わった哀の手には何故か二つ折りにされたテレフォンカードが握られていて、更には耳を真っ赤にして、ズカズカとコナンたちの下へと踏み込んできた。

「な、ナニ怒ってんだお前……」

コナンは珍しい哀の声に内心ビビっていた。知らぬうちに何か変なことをしてしまったのではないかと錯覚さえするが、心当たりはない。

タナは仲間を増やそうと、哀の近くまでいくと、
「新一がまた年上のお姉さんに鼻の下を伸ばしてた」

そう哀の耳元で囁く。

それを聞いた哀の青く宝石のような瞳が狐のように細まると、その瞳が氷のように冷たくなっていき、

「……ほほう」

続く言葉は語られないが、語られないからこそ、その内に秘められた言葉が瞳で語る。

またかこのやろう。

「大体分かりました。うん。どこからどう見ても工藤くんが悪い」「な、何でそうなるんだよ！ 俺が何かしたか！ ちょっと綺麗だなーって思っただけだろ？ そんなこと男だったら誰だって思うことだって！」

「別に綺麗な女の人に鼻の下を伸ばすことが悪いとは思わないけど！ 工藤くん周りにはやけに綺麗な女の人がゴロゴロ沸いてくるのよっ！ 工藤くんは事件だけじゃなくて、女の人も呼び込む最悪の招き猫か何かなの！」

「それ俺のせいじゃねーだろう考えても！ 事件うんぬんは確かに多いかもと思うけど、女の人が多いってのは心外なんですが！」「どうだか。子供のフリして女の人の体に接触するなんていやらしい」

「だ！？ だから、それは俺のせいじゃなくて、たまたま偶然……」
言って、柔らかい感触を思い出したのか、コナンの顔が真っ赤に染まる。タナと哀の顔もそれに合わせるように真っ赤に染まっていた。

コナンはとてつもなく嫌な予感がした。
だが、時すでに遅し。

一人の少年の顔の目の前には、二人の少女の拳が飛んできていた。

ギブソン Gibson・(10)(後書き)

最近本当に更新が遅れ気味で申し訳ないです。

本当に申し訳ありませんが更新速度をあげられない状況ではありますが、ゆっくりとですが更新はしていきます。出来ればお付き合いください。

感想・評価お待ちしております。

ギブソン Gibson・(11)(前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(11)

目新しい場所というものは時間が思いのほか浪費されていく。

そういう訳でコナンたち三人は地下街を歩いて回るだけで、いい暇つぶしになった。時間もいい感じになってきたということでコナンたちは地下街を出ることにした。

あれからいい時間になったはずだが、地下街の活気は衰えることがない。ただ、道を行く人々の服装が学生のモノとは違い、私服を着ている人間が目立つようになってきた。大方、私服の人間は家族連れか、恋人、友人のような、地下街で夕飯を取るために一度家に帰ってから、もう一度ここへ足を運んできたといったところだろうか。外が大分暗くなってきたのか、地下街の通路に設置された蛍光灯が付けられる。地下街には陽の光が入ってこないのです、こういう蛍光灯の明かりや道行く人々の服装で時間の経過を実感する。

コナンたち三人は通行人の邪魔にならないように通路の端を歩きながら雑談していた。

と。

壁際をゆつくりと進みながら話している三人の傍を走り抜ける人影があった。

「……、ん？」

コナンは見覚えのある人影に話を中断してまで、その人影に視線を向ける。

するとその人影も何かに気づいたように足を止めて、きよるきよると辺りを見回した。その人影は女性だった。

くるりと振り返った女性の顔は見覚えがあった。女性はコナンたちを見つけると、頭に手を置いてがっくりとうなだれた。それは遠目からも『やれやれ……』といったようなニュアンスが含まれているのが分かる。その女性は腰に付けた無線機に向かって、何かを話し始めた。かと思いきや、今度はコナンたち三人を睨み付けるよう

に視線を投げてくる。コナンがきょとんと何事かと考えていると、その女性はズカズカと歩いてきて、コナンたちの前で仁王立ちで止まり、

「あー……もう何でこういうところにキミはよくいるのかな……、ったく。何しているのキミたちは！ 避難勧告が出されてること知らないの！」

コナンは女性がいきなり怒鳴りつけてきたことにも驚いたのだが、何よりその女性が警視庁の刑事である佐藤美和子だったことにはコナンだけではなく、タナと哀の二人も驚いた。

「ど、どうしたんですか、佐藤刑事。いきなりそんな怒らなくても……」

タナがびっくりしたようにコナンの後ろからそう言うと、佐藤がわずかに首を傾げる。

「うん？ キミ、コナンさんの知り合い？ どうして私のこと知ってるの？」

言われて、タナは慌てて口を両手で押さえる。

コナンと哀の二人はいろんな事件を通じて、知り合いではあるが、つい先日高校生の毛利蘭から幼児化した希麻タナのことは知らないのだ。

佐藤は訝しげにタナのことを凝視するが、

「ごめん、やっぱり知らないや。何で私のこと知ってるの？」

やはりタナのことには気づかない。こめかみに指を置いて記憶を捻り出そうとしているが、そもそも希麻タナという人間が毛利蘭だということに気づくような人間はほとんどいない。いたとしても、それは『アポトキシAPT×4869』のことを知っている『組織』の人間ということになる。

つまり、タナのことを一目で毛利蘭と気づかない彼女は、『組織』とは関係のない人間ということだ。

「僕が教えたんだよ、佐藤刑事。この子は新しく引越してきた希麻タナちゃん」

これ以上にないくらいの子供の声でそう告げる。

佐藤はコナンとタナを見比べて、ふーんと頷いていたが、すぐに顔を引き締めて、

「っと。そんなことはどうでもよかったんだ」佐藤はコナンたちに視線を下ろして、「知らないなら教えておかないといけないわよね。ったく、他の刑事たちはこの子たちに気づかなかったのかしら。――まあ、いいわ、知らないなら口頭で説明するから」

一部分をぶつぶつと口の中で呟いていたが、背丈の差がありすぎて、コナンたちには聞こえなかった。

ずいっと、佐藤はコナンたちに近づいて、視線を合わせるようにしゃがみ込む。

「え？」

「えつとね。今ここには拳銃を持ったテロリスト……っていつていいのかしら。まあ……いつか。拳銃を所持した危険人物が紛れ込んでいるのよ。警視庁からとくに特別警戒態勢と避難勧告が布かれているの。今から……七二〇秒後――、一二分後にマルヒの捕獲作戦を開始するために全ての入り口を私たち警察が固めて、地下街を封鎖するの。マルヒが最低でも二丁以上の拳銃を持っていることから銃撃戦が予測されるから、民間人はここから早く逃げなさい。分かった？」

コナンは言葉にぎよっとした。

声がいつも以上に鋭いからということもあるが、『銃撃戦』なんて言葉を佐藤『刑事』から放たれたことに衝撃があった。それはコナンだけではなく、タナと哀の二人にも十分に伝わっているらしい。あまり実感が沸かない言葉にコナンは呆然とする。

「銃撃戦が予測されるってことは犯人の顔はもう分かっているってこと？ 顔も分からないのに銃撃戦なんてしたら大問題になると思うし」

「うん？ 顔はもう割れてる。近くの店の防犯カメラに私たちが見たテロリストの顔が映っていたから」

言つて、佐藤は胸ポケットから一枚の写真を取り出した。写真には一人の女の姿が写されていた。どこからどう見ても外国人風の女だ。これがテロリストの顔か――、とコナンが写真を見ようと手を伸ばすと、ひょいっと佐藤は自分の胸ポケットに写真をねじ込んだ。「分かったでしょ。ここは危ないからとっと逃げなさい。後七〇〇秒もないんだから」

それだけを言うと、佐藤は急いでこの場から立ち去っていく。

コナンは改めて周りを見渡す。私服の人間に話しかけられた人間が慌てて向かっていた方向とは逆の道を走り始める。どうやらそちらが出口のようだが、一步離れてその光景を見ると、どこか不出来な避難訓練のようにも見える。

（……私服警官は……確かに皆、拳銃を所持してるみたいだな）

私服で地下街の奥に走っていく人間は皆、左肩か右肩のどちらかが逆の肩に比べてわずかに下がっている。目を凝らして見ないと分からないが、私服の下が一センチほどの長さが膨らんでいる。それは拳銃を収めるためのホルスターなのかもしれない。

どうやら『銃撃戦』というのもあながち冗談で済むとは限らない、その必死さが地下街の空気を一変した。

「……これはやばいな。おい、お前らとつとここから出るぞ」

テロリストが相手だと子供の姿ではどうしようもない。下手なトラブルに巻き込まれる必要もないし、コナンはタナと哀を連れてここから逃げ出すことにした。

出口は民間人が逃げている方向と同じ。迷う必要はない。

ギブソン Gibson・(12)(前書き)

コナン視点です。

ギブソン Gibson・(12)

出口まで走つてくるとそこに見慣れた顔が見えた。

地下街の出口の周りには、四人か五人ぐらいの武装した男たちの姿が見える。どうやらその男たち全てが刑事のようだが、その男たちを刑事と断定するにはその風貌があまりにも異様だった。

服の上からは黒い防弾^{アーマー}装甲を身に付け、頭にはゴーグル付のヘルメット、形からしてヘルメットと呼ぶよりはフルフェイスと呼んだほうが妥当だろうか。ほとんど彼らは刑事と呼ぶよりはどこかの国の戦闘部隊にも見える。

あまりにも異常な光景にコナンはおろか、後ろに付いてきていたタナと哀の二人も萎縮していた。
当然だ。

日本で生まれ育ってきた人間からしてみれば、武装した人間が町を闊歩しているだけで、その光景が何かの撮影か、それとも夢であるかのような錯覚を覚える。それは何の不思議なことではない。それだけ目の前の光景が異常に写っているということだ。

だが、この光景が夢でないことを証明するように、コナンたちの目の前によく知る人間が現れた。

「コナンくんたちじゃないか！ 怪我はないかい？」

コナンたちを見つけると武装している男たちに軽く頭を下げて、

警視庁の刑事、高木渉が走って近づいてくる。

第一声が心配の声というところがとても彼らしい。

彼はフルフェイスこそはまだ身に着けていなかったが、それでも服の上から防弾^{アーマー}装甲を装備していた。それは彼の顔を知る者からすると、一目で彼の姿から日常を刈り取っていた。

しかし、彼の顔はいつものようににこやかで、

「佐藤さんから連絡が来てるよ。もう大丈夫だからね」
そう告げる。

(……、！？)

高木の言葉がコナンの耳には届かない。

見た。——否。

——見えてしまった。

高木の後ろで無線で地下街の中にいる刑事たちと連絡を取っていた刑事の手に見慣れないライフルが握られているのを。

ここは日本だ。

『銃撃戦』なんて言葉も佐藤の口から聞いたのだって、ほとんどありえない出来事だと認識していた。しかし、現に。日本の刑事がライフルを握っているこの状況にコナンは言葉を失う。基本的に日本という国は『武器』を持つことはするが、決してそれを『使わない』。日本での発砲は特別なことでもない限り、ほとんどが認められていない。あるとしても『闇』に生きる人間が『光』に生きる人間を脅かすために使うような『違法』だけ。

だがしかし。

警視庁という日本のトップの組織が、日本を守るために戦う『公務員』がライフルを所持している、この状況は紛れもない現実。

そう。言ってしまったえば、警察は『公務員』^{サラリーマン}なのだ。特殊な形式の『公務員』ではあるが、その実態は多少戦闘訓練を重ねた程度の、軍人とは程遠い、『民間人』。

だから、ライフルの取り扱いなんてほとんどないに等しいはずだ。「それにしてもキミたちは本当によく事件に巻き込まれるね。僕が いいお寺を紹介しようか？ そこね。悪運払いに長けてて、幸運が身につくって有名な所なんだ」

だからこそ。

——だからこそ、高木の日常の会話に違和感が生まれる。

高木の後ろのベルトに挟まれた、拳銃が。長さ一二センチほどの

黒い鉄の塊が。違和感を作り出す。

「……高木刑事も……中に入るの？」

「うん……？ まあ……ね」

言葉に高木は誤魔化さなかった。子供の言葉なんて簡単に聞き流すことが出来たはずなのに、高木はコナンの言葉に真っ直ぐとそう答えた。

「でも大丈夫。地下街を閉鎖さえしてしまえば、中にいるテロリストは簡単に捕まえることが出来るから。こっちは天下の警視庁だよ？ コナンくんたちが心配することなんて何も無いよ。大丈夫」
「やたらと大丈夫と強調する高木の言葉は気のせいなのだろうか。それは子供に言い聞かせるような。そんな安易な言葉なのだろうか。」

「じゃあコナンくんたちはこのまま家に帰るんだよ、いいね」

違和感が拭いきるより先に高木はその場で立ち上がり、コナンたちの傍から離れていく。

「だ、大丈夫……だよ、新一」

傍でタナが怯えるように言う。

きゅっと握られた袖にタナの震えが伝わる。

「……大丈夫だ。心配するようないことは起きない。絶対に」

……本当に？

言って、コナンは自分の言葉を信じられなかった。

（……大丈夫、……だよ……？）

とにかく子供の三人がこの状況で出来ることは何一つない。

だったら、子供がすべき行動はただ一つ。この場を一刻も立ち去ることだ。

そんな彼の判断は一つの言葉に遮断される。

「ね、ねえ……新一。あれ……なんだろ」

そういつてタナは地下街の入り口の近くに設置された自動販売機を指差した。

「なんだろ……って、自動販売機だろ、ただの」

「あ、ううん。そっちじゃなくて、その下」

「下？」

タナが指差したのは自動販売機ではなく、自動販売機の下の隙間の方だった。

何が見えるのかと、コナンはタナの指の先を視線で追ってみる。

すると、視線の先に小さな赤い光が見えた。それは本当に小さな赤い光で、よく観察してみないとほとんど分からないほどだ。

興味本位でコナンはそれに近づき、それを拾い上げる。

それは非日常に誘う、小さなきっかけだった。

日常を一瞬で、非日常に染め上げる、何者かの手。

『———見つけたア』

ギブソン Gibson・(12) (後書き)

お久しぶりです。ししとうです。

最近は小説を書く機会どころか読む機会さえなくなってしまう、ここにも中々来れませんでした。

もし、万が一にでも私の小説を楽しみにしておられた方がいたら、申し訳ありません。

何とか一ヶ月に一回の更新はしたいと思っておりますのでよろしかったらお付き合いくださいませ。

感想・評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570v/>

こどな！ 2

2011年11月8日08時17分発行